

68TH KOCHI
ART FESTIVAL
2018

平成30年度 第68回高知県芸術祭
高知アートフェスティバル
9.15^{sat} | 土 | → 12.16^{sun} | 日 | Autumn to Winter 2018

県民の文化芸術活動を支援、発信していきます。

事業実施報告書

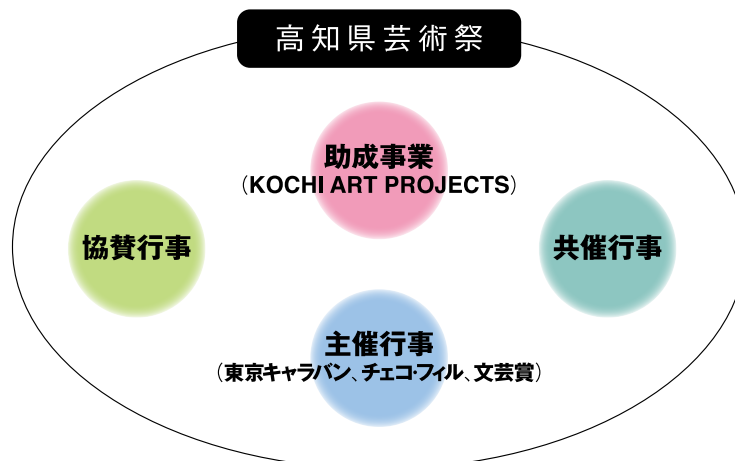
アート × 高知

平成30年度 第68回高知県芸術祭事業実施報告書 —目 次—

平成30年度第68回高知県芸術祭を顧みて /高知県芸術祭執行委員会 委員長 新納朋代	2
第68回高知県芸術祭概要	3
オープニングイベント 「東京キャラバン in 高知」 実施報告	5
助成事業 「KOCHI ART PROJECTS 2018」 募集要項・採択団体実施報告・事業報告会	7
第47回高知県芸術祭文芸賞 募集要項・応募状況等・入選作品一覧	50
メインイベント「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演!」 実施報告	53
共催行事	55
協賛行事	59
〈資 料〉 共催・協賛行事参加申請書	67
高知県芸術祭執行委員および文芸賞審査員名簿	

芸術祭とは

芸術祭＝広く県民が芸術に親しみ、高知の芸術文化の魅力を再発見、発信する期間



平成30年度第68回高知県芸術祭を顧みて

高知県芸術祭執行委員会
委員長 新納 朋代

今年で68回目を迎えました、『高知県芸術祭』は、広く県民が芸術に親しみ、高知の文化芸術の魅力を再発見、発信する期間として毎年秋に開催しております。

今年度は、9月15日（土）～12月16日（日）を会期として設け、約3ヵ月にわたり、主催事業『東京キャラバン in 高知』・『チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！』・『高知県芸術祭文芸賞』をはじめ、県内の文化芸術団体にご参加いただき、共催行事25行事、協賛行事61行事、助成事業『KOCHI ART PROJECTS 2018』15事業の計104の行事が実施されました。

9月15日（土）には、オープニングイベントとして、『東京キャラバン in 高知』を県立美術館中庭にて開催いたしました。県内外から参加したアーティスト達が共に創り上げた舞台は、どこか異空間にいるような雰囲気もあり、和楽器の音色や現代舞踊などあらゆる要素が融合した演出には終始圧倒されたことでした。来場されたお客様たちも、その独特の雰囲気を楽しまれていたように思います。

共催・協賛行事に関しましては、参加団体こそやや減少したものの、参加行事への参加者は増加いたしました。当執行委員会といたしましても、引き続き、多くの文化芸術団体の皆さまにご参加いただけるよう、広く呼びかけを行い、県内の文化芸術団体の皆さまにとって芸術祭参加が秋の恒例行事と定着しますよう、さらに、執行委員会、事務局一丸となり、検討して参りたいと思います。

今年で5年目となりました、助成事業『KOCHI ART PROJECTS 2018』では、19の団体・個人よりご応募いただき、審査の結果、15事業への助成を決定致しました。年々、開催地域や部門にも広がりが見られており、少しずつではありますが、高知県芸術祭の助成事業も認知されてきているのではないかと感じております。来年度以降も、より充実した内容の事業を県内の文化芸術団体の皆さまが企画・運営していけるよう、執行委員会としても協力して参る所存です。

12月11日（火）には、メインイベント『チェ

コ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！』と題し、世界の名門『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団』に所属する演奏家2名と、高知県出身ピアニストによる競演が行われました。演奏会では、チェコの演奏家から貴重なお話を伺うトークタイムや嬉しいアンコール曲の披露もあり、来場されたお客様からは惜しめない拍手が演奏家へ送られておりました。また、公演アンケートでも多くのお客様から好評をいただいております。演奏会の詳細については、事務局による報告が掲載されております。ぜひご一読ください。

また、文芸の総合的な公募型文芸賞である『高知県芸術祭文芸賞』は、47回目を迎え、今年も短編小説・詩・短歌・俳句・川柳の5つの部門で公募を行いました。全体での応募総数はやや減少したものの、短編小説部門・川柳部門では増加が見られ、全体では477名の方々から1565作品の応募がございました。今年も幅広い年代の方々にご応募いただき、学校や学生個人からの応募も数多くありました。若い方々が文学に興味を持ち、文芸賞に挑戦してくださることは、大変喜ばしい事です。

私どもといたしましても、引き続き高知県内の多くの方々に、文芸賞への応募を呼び掛けるなど、高知県の文芸の振興に寄与して参りたいと考えております。

本報告書では、平成30年度高知県芸術祭の成果をまとめております。各所よりご意見をいただきながら、より一層広報を充実させ、多くの県民に『高知県芸術祭』を承知いただけるよう、高知県芸術祭執行委員・事務局共に一丸となり努めて参りたいと思っております。今後とも、より一層のご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2018」：15事業・6,205人

主催事業「東京キャラバン in 高知」：約450人

「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！」：371人（来場者）

「高知県芸術祭文芸賞」：477人（1,565作品）

共催行事：25行事・154,369人、協賛行事：61行事・107,648人

第68回高知県芸術祭 概要

《今年度の芸術祭を振り返って》

今年度のオープニングイベントは、高知県、そして四国地方でも初となる『東京キャラバン in 高知』を東京都及びアーツカウンシル東京の共催で開催いたしました。パフォーマンスを指揮するリーディングアーティストに『木ノ下歌舞伎』を主宰する、木ノ下裕一氏を、演出に北尾亘氏をお迎えし、高知と東京の表現者達によるジャンルの壁を超えた文化混流が、高知で実現いたしました。本公演は公演前より注目を集め、当日は多くのメディアの取材と観覧客に恵まれ、高知県芸術祭のオープニングに相応しい催しとなったのではないかと思います。開催に際し、ご尽力いただきました、東京都及びアーツカウンシル東京の皆様、高知県立美術館の皆様、関係スタッフの皆様、そしてご出演いただいたアーティストの方々に改めて感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

高知県芸術祭は今年で68回目を迎えました。長い歴史を持つ芸術祭ではありますが、県内での認知度はまだまだ低いのが現実です。今年度は、昨年度初めて導入した、帯屋町アーケードへの吊り広告でのPRを継続し、新たに、高知県芸術祭の『のぼり旗』を作成いたしました。この『のぼり旗』は、主に助成事業『KOCHI ART PROJECTS 2018』の採択団体さまへ配布を行い、各事業の開催期間中、会場にて掲げていただきました。少しずつではありますが、“高知県芸術祭”の存在を県民の皆様にご周知いただき、ご参加いただけるよう、引き続き思案して参りたいと思います。

今年で5年目を迎えました、助成事業『KOCHI ART PROJECTS 2018』では、昨年度より3団体多い15の団体・事業が採択されました。事業の分野も演劇、音楽、美術など多岐にわたり、開催地域においても、東は奈半利町から西は大月町まで県内各地であらゆる事業が開催されました。今後も、文化芸術団体・個人の皆様が事業を通し

て“地域貢献”や“地域活性化”を進めていけるように応援して参りたいと思います。助成金に対する質問や相談は随時受け付けておりますので、いつでも事務局までお問い合わせください。

12月11日（火）には、メインイベントとして『チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！』を開催いたしました。世界の名門『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団』に所属されているヴァイオリニストで若きコンサートマスター、イルジー・ヴォディチュカ氏、首席チェリストであるフランティシェク・ホスト氏、香南市出身で現在は東京でご活躍されているピアニスト濱口典子氏という豪華競演が実現いたしました。ご来場いただいた多くのお客様からも好評をいただき、少し早いクリスマスプレゼントを皆様にお届けできたのではないかと考えております。演奏会開催に際し、ご尽力いただきました、アルペジオ音楽企画の皆様、チェコ共和国よりお越しいただいた、イルジー氏とフランティシェク氏、故郷での演奏会を大成功に導いてくださった濱口氏、そして関係スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

芸術祭閉幕日である、12月16日（日）には、『高知県文芸賞』の表彰式を行いました。今年度も県内在住の小学生から大人までの幅広い文芸家の皆様からご応募いただきました。各分野で、小学生～高校生までの受賞者も多数選出され、これからの未来を担う若い力に希望を感じることができました。高知県は全国でも有数の文学者を輩出している県でございます。県民の皆様、そして若い世代がより文芸創作に興味を持ち、創作活動を創出できるよう、引き続き、各所へ働きかけて参りたいと思います。

本報告書では、芸術祭主催事業（東京キャラバン in 高知・文芸賞・チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！）、助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2018」、芸術祭共催・協賛行事について、報告を記載しております。是非、ご高覧ください。



《芸術祭広報チラシ兼ポスター》

開催期間	平成30年9月15日（土）～12月16日（日）
主催	高知県・（公財）高知県文化財団
主管	高知県芸術祭執行委員会
後援	NHK高知放送局・高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・KCB高知ケーブルテレビ・エフエム高知・チェコ共和国大使館（メインイベントについてののみ）

平成30年度 第68回高知県芸術祭 日程表

- 4月25日 「KOCHI ART PROJECTS 2018」 募集チラシ・要項 発送（募集締切：5月31日）
芸術祭参加団体募集のご案内 発送
（募集締切：8月20日 ※芸術祭公式ガイドブック掲載希望分 締切：7月2日）
6月7日 第47回高知県文芸賞作品募集チラシ 発送（募集締切：9月28日）
6月13日 第1回高知県芸術祭執行委員会およびKAP審査会（高知県立美術館・2階会議室）

《議事》
平成29年度高知県芸術祭決算について
《報告事項》
芸術祭の進捗状況について
※執行委員会終了後、KAP一次審査会を開催

- 6月24日 「KOCHI ART PROJECTS 2018」 二次審査会（高知県立美術館・2階会議室）
8月21日 芸術祭公式ガイドブックおよびチラシ兼ポスター 発送
9月12日 第2回高知県芸術祭執行委員会（高知県立美術館・2階会議室）

《議題》
(1) 「KOCHI ART PROJECTS 2018」 助成事業の視察について
《報告事項》
(1) 共催、協賛行事の参加状況について
(2) 芸術祭広報について
(3) メインイベントについて
(4) 今後の日程について

- 9月13日 「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！」観覧者募集チラシ 発送
9月15日 第68回高知県芸術祭開幕
9月16日 オープニングイベント「東京キャラバン in 高知」開催（高知県立美術館ホール・中庭）
『古民家ART&LIVE』（KAP助成事業） ※9月30日迄
9月18日 「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！」観覧者募集広告掲載（高知新聞・朝刊）
9月23日 『八畝AutumnFesta2018 ― 八畝に酔いこのふるさとに出会うー』（KAP助成事業）
10月7日 『Shikoku サイハテ Toropical 2018』（KAP助成事業）
10月13日 『打楽器の祭典Vol.4』（KAP助成事業）
『全国映連フェスティバル高知×シネマの食堂「映画と地域の未来」について考える』（KAP助成事業） ※10月14日迄
10月16日 『宿毛のお宝アーカイブスプロジェクト』（KAP助成事業） ※12月8日迄
10月17日 第47回高知県芸術祭文芸賞審査会（高知県立美術館・2階会議室）※10月23日迄（内、5日間）
10月20日 『第6回 旭オンリーワン芸術祭』（KAP助成事業）
10月25日 『香北にアートを生む～古民家でのアーティスト・イン・レジデンス+インスタレーション』（KAP助成事業） ※11月29日迄

- 11月1日 『山下豊写真展「足摺黄金糖2017」』（KAP助成事業） ※11月18日迄
11月4日 『フェスタ デ エスパニョール レストランテとステージ』（KAP助成事業）
11月9日 『インスタント“KANTA”ポートレート展』（KAP助成事業） ※11月18日迄
11月10日 『わっしょい！わっしょい、わっしょい、祭りだ、わっしょい！「キネマM豊穰祭」』（KAP助成事業） ※11月11日迄

- 12月1日 『防災ママカフェ+「すさきでおどろう。かぞくでおどろう。」パフォーマンスワークショップ』（KAP助成事業） ※12月9日迄

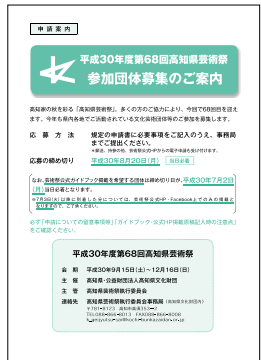
- 12月8日 『アートツーリズム ～ ゲージョツ遍路in大月町 ～』（KAP助成事業）
※12月15日は、大阪府にて報告会を開催

- 12月11日 メインイベント「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！」開催（高知県立美術館ホール）

- 12月13日 『地域の「ための」民謡づくりー「たらしめことば」の語りとアートの実践』（KAP助成事業） ※12月15日迄

- 12月16日 第47回高知県文芸賞表彰式（高知県立文学館・文学館ホール）

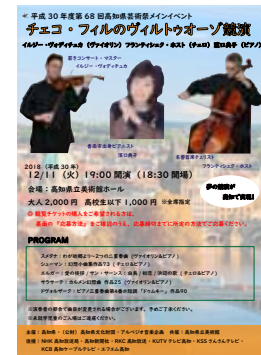
- 平成31年
1月27日 助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2018」事業報告会（ちより街テラス・3階会議室1.2）
3月28日 第3回高知県芸術祭執行委員会（高知県立美術館・2階会議室）
注）KAP … KOCHI ART PROJECTS



《芸術祭参加団体募集のご案内》



《東京キャラバン in 高知》



《チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！》

オープニングイベント「東京キャラバン in 高知」

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、高知県、公益財団法人高知県文化財団

撮影：石川拓也



今年度は高知県芸術祭オープニングイベントとして9月16日に「東京キャラバン in 高知」を東京都及びアーツカウンシル東京と共に開催しました。「東京キャラバン」は、「東京2020オリンピック・パラリンピック」の文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトとして、2015年に始まりました。劇作家・演出家・役者である野田秀樹氏の発案により、多種多様なアーティストが出会い、国境／言語／文化／表現ジャンルを超えて、“文化混流”することで、新しい表現が生まれるというコンセプトを掲げ、それぞれのジャンルを超えたパフォーマンスを各地で展開しています。

「東京キャラバン in 高知」は気鋭の表現者として知られる“木ノ下歌舞伎”主宰の木ノ下裕一さんがリーディングアーティストを、振付家の北尾亘さんが演出を務めました。お二人は7月6日～9日



の4日間、高知県のアーティストや伝統芸能、食文化、様々な地域の方からお話を聞くなど「高知」について入念なリサーチを行った上で創作に取り掛かりました。

9月10日、東京からの参加アーティストとして、木ノ下さん、北尾さんの他にも俳優の大石将弘さん、澤田慎司さん、端田新菜さん、ダンサーの米田沙織さん、安部萌さん、作曲家の山道弥栄さんが来高し、高知からは高知県庁正調よさこいクラブ、カポエイラ バトゥーキ ジャパオ高知（カポエイラ）、ふたりっこプロデュース（演劇）、繁藤雅陽会（雅楽）、山田太鼓伝承会（山田太鼓）に参加していただき、1週間の創作活動が始まりました。木ノ下さんの構想をベースにそれぞれの持ち味を重ねていくような創作過程はとても濃密で熱気に包まれていました。またその裏では高知県立美術館・中庭でのパフォーマンスに向けてスタッ



フ陣による様々な課題などをクリアするための準備も進んでおり、参加者全員が一丸となってこのイベントに取り組んでいました。

9月16日、前日まで天気が悪く、野外でのパフォーマンスは難しいかも？という予想を良い形で裏切り、久しぶりの晴天！日中から出演者、スタッフによる念入りなリハーサルを行い、刻一刻と開演の時間が迫ってきました。そして17：30、ついにパフォーマンスが開幕！木ノ下さんのテキスト、北尾さんが振り付けたダンス、東京のアーティストによる演技、それに呼応するように高知のアーティストの音楽やパフォーマンスが絡み合い、高知県立美術館・中庭に素敵な世界が立ち上がりました。立ち見が出るくらい満員御礼の会場に詰め掛けた450名ほどのお客様もそのパフォーマンスに釘付けとなり、日常では味わうことのできない異空間の体感ができていたように思います。1ステージしか行えないのが本当にもったいない！と思っていましたが、逆に1ステージに懸けるアーティストの気迫のようなものによって奇跡的なパフォーマンスが生み出されたように感じました。

終演後、参加したアーティストは高知での創作期間が本

当に楽しかったようで、今後も様々な形で交流を続けていく約束などを行っていました。また高知のアーティスト同士も、これまで出会う機会がなかった方々が「東京キャラバン」を介して出会い、世代の差も超えて今後につながる交流ができたと感じています。「東京キャラバン in 高知」での文化混流によって高知にもたくさんの「文化の種」が蒔かれました。この種が2020年のその先へどんな形で結実していくのか今から楽しみでなりません。そして今後も様々なイベントを開催し、高知県に多種多様な「文化の種」が蒔けるよう尽力したいと思っています。

（文責：齋藤努）



助成事業「KOCHI ART PROJECTS 2018」

募集要項

平成30年度 第68回高知県芸術祭助成事業 「KOCHI ART PROJECTS 2018」募集要項

「地域×アート」をコンセプトに高知県内で開催される
文化芸術活動に助成等の支援を行います。

対象となる活動	◎平成30年度高知県芸術祭開催期間中に実施されるもの 芸術祭会期：平成30年9月15日(土)～12月16日(日) ◎営利を目的としないもの ※ 事前の準備等に係る費用も助成の対象となります。 ※ 個人でも団体(NPO・実行委員会等)でも応募いただけます。
審査項目	◎創造性:新たな視点や他分野・異業種との協働など事業内容に創意工夫がみられるか。 ◎地域性:地域の課題解決に向け、地域住民(組織等)と連携するなど地域への貢献や地域の活性化に繋がる計画がみられるか。 ◎持続性:一過性のイベントではなく、将来のビジョンや長期的展望がみられるか。 ◎波及性:県民や団体等に幅広く情報発信を行うなど、事業を通じて人々の交流を促進する計画がみられるか。 ◎実現性:事業実施に向けて具体的な事業計画がみられるか。また、申請書等の提出書類の不備がないか。
支援内容	助成：1事業あたり上限額30万円 ※ 少額(10万円程度)での申請も可能です。 ※ 選考委員会にて、提出された申請内容と申請額を勘案し助成額を決定いたします。 ※ 過去に助成を受けたことのある団体も応募できます。
支援条件	◎広報物等に指定クレジットを必ず記載すること。(記載のない場合は助成交付を取り消す場合があります。) ◎事務局が作成する広報物等への原稿作成協力ができること。 ◎支出経費について領収書を保管、指示があった場合はすぐに提出できること。 ◎指定の様式により実績報告を提出すること。(事業終了後1ヶ月以内。) ◎後日開催予定の事業実施報告会に<u>必ず</u>参加すること。 (平成31年1月27日(日)(予定)) ※ 指定クレジットは、芸術祭公式ホームページからダウンロードできます。 ※ 採択された事業は高知県芸術祭執行委員等が視察します。 ※ 報告会参加に伴う旅費等の費用は各自ご負担ください。 ※ 助成団体のうち、1団体以上は、領収書を含め支出の詳細について確認致します。
応募方法	募集期間内に、規定の申請用紙に必要事項を記入し、高知県芸術祭執行委員会事務局まで持参、もしくは郵送にてご提出ください。 ※ 申請用紙は、芸術祭公式ホームページからもダウンロードできます。 ※ 申請用紙を送付希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。 ※ 応募後、電話等によるヒアリング、追加資料の提出等を求める場合があります。 ※ 過去採択団体の実施報告等は芸術祭公式ホームページに記載しております。申請にあたってご参考ください。
募集期間	平成30年5月31日(木)まで ※当日必着
選考方法	書類選考による一次審査を行い、追って二次審査会にて<u>代表者等の出席のもと</u>プレゼンテーションを行っていただき選定します。(平成30年6月24日(日)開催予定) 結果は審査後、一週間以内に郵送にてお知らせいたします。
助成金の交付	所定の請求書提出後2週間以内に、指定先口座に振り込みます。 ※ 事務局にて必要と認めた場合に限り、助成決定額の2分の1を超えない範囲で概算払も可能です。
申請書等郵送先	〒781-8123 高知県高知市高須353-2 (公財)高知県文化財団 内 高知県芸術祭執行委員会事務局 宛

「KOCHI ART PROJECTS 2018」に関する問い合わせ先 ※受付時間 / 平日9:00～17:00

TEL.088-866-8013

✉ k_geijyutsu-sai@kochi-bunkazaidan.or.jp

〒781-8123 高知県高知市高須353-2
(公財)高知県文化財団内 高知県芸術祭執行委員会事務局
FAX.088-866-8008 HP: <http://www.kochi-art.com/>
f <https://www.facebook.com/kochi.art/>

★助成事業紹介★

(平成30年度選考結果 19団体・19事業応募、15団体・15事業選定)

★実施報告★

※原則として、事業終了後に提出された実施報告書をもとにしています。

古民家Art & Live

団体名：なはり浦の会

開催期間：平成30年9月16日(日)～9月30日(日)

会場名：【Art展】藤村製絲・高田屋・増田屋・旧野村茂久馬邸・なはりの郷
【Live会場】濱田邸

入場者数：3200人

事業の内容

奈半利に残る古民家を活かし、現代美術作家の展覧会やライブを開催。古民家・町並み、美術、音楽がコラボレーションする事により、それぞれが持つ魅力を高め合い更なる可能性を創造する。様々な角度からの交流人口を増やすと同時に、地域住民にとって営みと意識の中に埋もれている古民家・町並みを再確認する機会とする。昨年も同イベントを開催したが今回は作家・会場共に増やし、進歩発展させる形となっている。

成果・反響

《アンケートより一部抜粋》

- 観光しながら、古民家もアートも見られて良いイベントだと思います。
- 本当に町々のいたるところで、皆さんのご親切に出会い、感謝です。
- 奈半利の古民家にびっくり。すてきなアイデア、作品ですね！継続されますように。
- わざわざ奈半利にくる理由になる楽しさ。(京都市から)

助成を受けたことによってできたこと

今回助成をいただいた事により、昨年より会場を増やせ、多くのアーティストに参加してもらえ、更に可能性を感じられるイベントを催せた。昨年も助成をいただいた事によって開催でき、継続を望んで下さる声が多くあったので、何より継続して開催できた事が一番大きい。

今後に向けて

2年連続継続して開催できた事により、来場者だけでなく出展者・出演者も次回開催に意欲的になっている。彼等は既に次回の展望を考えており、主催者としても来年度も是非開催したいと考えている。



(助成額：30万円)

八畝AutumnFesta2018 ― 八畝に酔い この ふるさと に会う ―

団体名：八畝AutumnFesta2018実行委員会

開催期間：平成30年9月23日（日）

会場名：長岡郡大豊町八畝

入場者数：70人（地域33人、地域外37人）

事業の内容

「むら全体が劇場」をコンセプトに、例年の棚田野外上演『生きてゐる小平次』に加えて、地区住民のお宅をお借りして上演『宮城野 ― MIYAGUINO ―』、村のランドマークである乳イチョウそばのお堂での上演『羅生門』を実施した。その上で、地区の方々に協力頂き、地きび焼酎「八畝」とともに地元の郷土食を頂く交流会を実施した。

成果・反響

過去のイベントと比較しても非常に好評であった。高知市内だけでなく、東京、大阪、愛媛、四万十町など高知市近辺以外からの参加が多くあり、リピーターの参加者も多く、活動の広がりを感じる事が出来た。また、アンケートには反映されていないものの八畝集落をはじめとする大豊町民の観劇者が33名となっており、単なる外部者誘致のイベントではなく、地区に還元されたイベントとなっていることが伺える。

助成を受けたことによってできたこと

助成を頂いたことにより、イベント実施に関わる現地打ち合わせを複数回行うことができ、円滑な運営を行うことができた。また、夕闇の中での棚田演劇『生きてゐる小平次』では貴財団の助成を活用して照明・音響を設置することが出来た。これにより、棚田の暗闇を生かした幻想的で幽玄の雰囲気が漂う演劇を実施することが出来、観客に非常に好評であった。

今後に向けて

今後も本活動を継続し、「むらのアート」と「まちのアート」が出会う場・八畝として、地区住民の誇りの再生と地区に愛着をもつ交流人口の拡大に努めたい。



(助成額：30万円)

Shikoku サイハテ Toropical 2018

団体名：竜串トロピカル実行委員会

開催期間：平成30年10月7日（日）

会場名：海のギャラリー 野外芝生広場

入場者数：72人

事業内容

音と色の祭典 南国音楽野外イベント

成果・反響

地元の来客者が増加し、年齢層も広がった。

ボランティア参加も地元からの年配の方の参加者が増えた。

助成を受けたことによってできたこと

前回の入場料2500円を1000円に減額できた。

ゲスト出演者をバンド単位で招く事が出来グレードアップ出来た。

ボランティアスタッフにもケイタリングなど提供できる様になった。

今後に向けて

まだまだ来場者数は少ないが確実に前回より来客数は増加した。次回の開催が楽しみです。



(助成額：30万円)

打楽器の祭典Vol.4

団体名：立川番所保存会

開催期間：平成30年10月13日（土）

会場名：旧立川番所書院

入場数：156人

事業の内容

旧立川番所書院の積極的な利活用及び立川地域の活性化を目的として、昨年度から打楽器にスポットを当てたコンサートを行ってきた。第4回目となる当該コンサートは「フィナーレ」として、過去3回出演した奏者が集まり演奏を行った。

成果・反響

《アンケートより一部抜粋》

- すべて良かった。感動しました。
- 最高の青空の下で生演奏が聴けて、山の峰を見ながら聞いていると世界を旅している思いがし、とても感動しました。心の中に何か忘れていた物が蘇った思いです。
- バラエティーに富んでいて良かった。野外で山の緑をバックに演奏というのを見るのも新鮮。
- 演奏曲がなじみの曲でとても良かった。
- 自然の中でのコンサートとても良かったです。夜のコンサートは来るのに不安でしたので、今日の昼間のコンサートで来るきっかけとなりました。

助成を受けたことによってできたこと

1 平成29年度から平成30年度にかけて、打楽器にスポットを当てた4連続コンサートを開催することとし、フィナーレとなる今回は、これまでの出演者、全員でのコンサートを計画していた。このため、奏者の謝金や音響、舞台に要する予算の確保が課題であった。助成を受けたことにより、当初の計画どおり実施することができた。

2 人口が154人となった立川地域は、高齢化が進んだ地域であるが、高齢化率が83％に達した現在も、地域の宝を守るために、旧立川番所書院や参勤交代道の保存活動を行っている。立川地域保存会では、今回のコンサートに併せて蕎麦の植え付けを行い、花咲かせたり、旧立川番所書院前の中庭を整地したり、コンサートの成功に向けて取り組みを行うなど、地域全体での取り組みが行えた。

今後に向けて

立川地域のシンボルである旧立川番所書院を活用した音楽会を今後も続けて行く予定。来年度からは、花と音楽を組み合わせたイベントを検討中。

旧立川番所書院はもとより、立川地域の素晴らしさを多くの方に知ってもらうことや、これらの取り組みが地域の活性化に繋がるよう、保存会としての役割を果たしていきたい。



(助成額：30万円)

全国映連フェスティバル高知×シネマの食堂 “映画と地域の未来”について考える

団体名：とさりゅう・ピクチャーズ

開催期間：平成30年10月13日（土）～10月14日（日）

会場名：高知県立美術館ホール・かるぼーと中央公民館大講義室

入場数：201人

事業の内容

県民や全国から来高する映画ファンとの交流の場の提供、若年層の人材育成を目指し、映画「君が君で君だ」の上映、宣伝プロデューサー渡辺尊俊さんの講演、全国の映画サークルの取り組み交流会の3つのイベントを開催しました。また、県内の自主上映団体と人気カフェが運営する“シネマの食堂”と共催し、「地域の郷土料理×自主上映」をテーマに幅広い客層を取り込み、高知が誇る自主上映文化を広めることが出来ました。

成果・反響

《成果より一部抜粋》

- 若者に響く作品上映に挑戦することが出来た。
- 県外のお客様を呼び、高知の食品を販売しながら映画上映を行い、高知の自主上映文化、食文化の魅力を伝えることができた。
- 学生からは「最高に面白かった」という声が多かったが、長年の映画ファンからは「難解だ」という声もあった。宣伝プロデューサーの舞台挨拶によってその差を補足し、若者の望む上映会と、映画ファンの望む上映会の橋渡しをすることが出来た。
- 「どうすれば若者に、自分たちの見せたいものを届けられるのか」という講演をしてもらい、参加者全員が後進育成についてヒントを得ることが出来た。
- 各団体の取り組みを発表し、議論することで、映画文化の繁栄に向け、全国のサークルが繋がるが出来た。
- ゲストや他県の映画上映団体、普段と違う客層に触れることで、今後の課題を見直し、映画文化を広げていくための足掛かりを作ることが出来た。

《反響より一部抜粋》

- 講演会を聞き、どうすれば若者に映画文化に触れてもらえるのか、ヒントを得ることが出来た。「見せたい」と「見たい」の差を埋める。今後、映画文化を広めるために活用します。
- シネマの食堂企画、すごく興味深いです。いろいろな団体がネットワークをつくって取り組むというスタイルはあまり見たことがなく、企画も幅広くて刺激になりました。

助成を受けたことによってできたこと

今回の助成を受けることで、ゲストの招聘や、普段のメイン層ではない若者にも響く作品の上映に挑戦し、普段の上映会とは違った客層へ向け上映会参加の足掛かりを作ることができました。

また、『講演会』と『取り組み交流会』の参加費を無料にすることで、今後の課題改善・後進育成へのヒントを、県内の芸術イベント関係者や、県外のお客様にまで広く伝えることができました。

今後に向けて

ゲストでお呼びした宣伝プロデューサー 渡辺尊俊さんより、来年の「シネマの食堂」にて「土佐ティーンシネマ」という枠を設け、学生の映画上映を渡辺さんとシネマ四国でサポートしようというご提案いただきました。

現在、始動に向け準備をはじめており、今回のイベントによりできたご縁で、後進育成への新たな流れを作ることができました。



(助成額：30万円)

宿毛のお宝アーカイブスプロジェクト

団体名：宿毛観光市民ガイドの会

開催期間：平成30年10月16日（火）～12月8日（土）

会場名：宿毛まちのえき林邸・すさきまちかどギャラリー・片島公民館

入場者数：延べ657人

【写真展】宿毛会場397人 須崎会場91人

【松田川とわたし】30人

【宿毛の祭りとお社めぐり】演奏会60人 街歩き12人

【ハイカラな街、片島】67人

事業の内容

【写真展】「わたしの好きな宿毛」をテーマにして、ガイド会員が人に見せたい宿毛の景色を写真にして、宿毛市と須崎市の施設において展示した。

【街歩き&イベント】「松田川とわたし」…街歩き、宿毛に関するストーリーテリング
「宿毛の祭りとお社めぐり」…古写真パネル展、ミニ演奏会、街歩き
「ハイカラな街、片島」…音楽鑑賞会、パネル展、写真による街歩き

【フォトブック作成】今回の芸術祭の写真をもとめ、地域との関わりなど記録として残した。

成果・反響

- 宿毛のお宝を様々な形で表現して知ってもらいイベントに大勢の方々が訪れて楽しんでもらえた。懐かしい、初めて知ったなどの感想が聞かれた。
- 各イベントにおいて参加者、出演者ともにガイド会へ好印象を持っていただき、発足して間もないガイド会の存在を地域内に示すことができた。
- スタッフがお互いに協力し合うとともに、地域との共催や地域住民の出演によって、ガイドの会と地域が一丸となり、今後の活動に対する共通の意識が芽生えた。

助成を受けたことによってできたこと

- 旅費、謝金、会場設営費等によって写真展を須崎市内で開催し、宿毛のお宝を地域内だけでなく、高知市街に近いところで発信することにより県内に広く周知することができた。
- 謝金によって個人蔵されていた宿毛の古写真をパネル化し、写真展で展示することにより地域の方々に懐

かしい宿毛の風景を楽しんでいただくとともに、ガイド会員が昔の宿毛に関する情報を聴取するきっかけとなった。

- 印刷製本費によってチラシ、フォトブックを作成し、大勢の方々にイベントを周知するとともに、イベントの状況を記録して今後のガイド会活動の参考に残すことができた。

今後に向けて

ガイド会が通常に提供しているガイド活動においては、申込みされた観光客に対して、街を歩いている際に目に見える景色について案内することが中心となるが、良い瞬間を切り抜いた写真、物語りや歌に表現された風景、昔の写真など、アートとして形に残したものを見ていただく機会を創ることで、より深い宿毛の景色を大勢の方々に楽しんでもらえるということがよく理解できた。

今後もイベントなどの機会をとらえ、ガイドとして案内できる情報をアーカイブスして、できるだけ大勢の方々に宿毛のお宝を知っていただく活動を進めていきたい。



(助成額：30万円)

第6回 旭オンリーワン芸術祭

団体名：旭オンリーワン芸術祭実行委員会

開催期間：平成30年10月20日（土）

会場名：男女共同参画センター「ソーレ」及び周辺地域「まちなかギャラリー」

入場者数：約663人

事業の内容

旭地域の隠れた人材や埋もれた作品にスポットを当て、発表の機会を創設する為に開催。芸術を通して、作り手が作品に込めたオンリーワンの想いに触れる事、参加者が相互に交流を持つ事、社会参加の意欲を向上する事、世代や障害の有無に関わらず楽しく参加出来る事を目的とする。当日はまちなかギャラリーを設営し、地域全体が会場となるエリア芸術祭的表現で、気軽に散策、交流、体験、鑑賞を楽しんで頂いています。

成果・反響

広報活動として、SNSのツール（Facebook・YouTube）を活用した。また、開催前には新聞に広報記事として大きく掲載され、保育園や小学校等には世帯数分のチラシを配布するなどして活動した結果、多くの参加者から「新聞見て来ました」「チラシ（ポスター）見て興味持ったので」といった声が聞かれ、今まで開催してきた中で一番多くの来場者数となった。

助成を受けたことによってできたこと

これまでよりも盛んに広報活動に力を入れることができた。また、新たなオリジナルキャラクターが生まれたため缶バッジの製作、スタンプラリー制覇者へのプレゼントとしてオリジナルバッグの製作、のぼり旗、

手旗などさまざまなPRグッズを準備することができた。バッグは、買い物時などの袋として使用していたが、「袋があるのは助かる」「かわいいね」との声もあり、参加者の心にも残るものとなったと感じる。

今後に向けて

前年度よりも参加者は増えたが、場所によって集客の偏りが見られることもあり、立地条件や広報などの検討が必要。また、内容の拡大に伴い実行委員間での情報共有や連携がうまくできず、当日もスムーズに動けなかった点もあった。地域×専門機関×社協とさまざまな分野が関わりながら創り上げているため、それぞれの得意分野を活かしながら、連携していけるよう強化していくこと、さらにもっと多くの住民に関わってもらえるよう働きかけていきたい。



(助成額：14万2千46円)

香北にアートを生む～古民家でのアーティスト・イン・レジデンス+インスタレーション

団体名：AiRLite Kochi（エアライト高知）

開催期間：平成30年10月25日（木）～11月29日（木）

会場名：AiRLite Kochi

入場者数：約300人

事業の内容

- ・現代美術家「大和由佳」アーティスト・イン・レジデンス
 展示会「Where Humans Stand Together With Water」
- ・滞在作家、大和由佳氏によるワークショップ1『空をつかまえよう』in 永野地区田んぼ
- ・滞在作家、大和由佳氏によるワークショップ2『杖をつくろう』in 集落活動センター美良布
- ・太田市美術館・図書館学芸員「小金沢 智」氏による『アートと生きる』レクチャートーク

成果・反響

今までアートに縁のなかった近所のお年寄りの方や地域の方々から、アーティストや学芸員の方と触れ合うことで少しアートとの距離感が近くなったという声を聞くことが出来ました。日常の中で作品を鑑賞したりWSに参加してもらうことで、新たな視点から自分たちの暮らしや価値観を考えたり、見つめなおすきっかけを作ることができたと思います。

また、アーティストという職業があるということや、表現することの自由さ多様さも掲示できたと思います。

助成を受けたことによってできたこと

招聘作家に作品制作、発表、ワークショップや地域の方々との交流を行うための費用をサポートすることができ、一ヶ月という期間滞在してもらえたので作品や展示方法のクオリティをあげることができた。

その他にも招聘作家の作品発表のオープニングにあわせて、現役の美術館学芸員（太田市美術館・図書館学芸員、小金沢智氏）を呼ぶことができ、田舎ではなかなか機会がなかったアートについての講演に参加無料で行うことができた。

今後に向けて

次のプロジェクトも今回と同じようにアーティストレジデンスをやる場合は招聘作家の作品や人柄によってかなり展示会の内容やイメージが変わってくるので、そういった特色を生かしながら次の開催の実現に向けて計画を進めたいと思います。そのほか、出来るだけ積極的に行政や地元の企業や団体、学生などにこの活動の趣旨を理解していただけるよう努力して、ボランティアの確保や広報、物資、資金など協賛して下さる方々を増やしていきたいと思います。



(助成額：30万円)

山下豊写真展「足摺黄金糖2017」

団体名：山下豊写真展実行委員会

開催期間：平成30年11月1日（木）～11月18日（日）

会場名：海風食堂（ジョン万次郎資料館1階）

入場者数：約180人

事業の内容

足摺黄金糖は、土佐清水市大岐地区周辺で、受け継がれて精製されている砂糖です。サトウキビの栽培から製糖を中心となって行っているのは、元地域おこし協力隊とその家族です。地域おこし協力隊を退任後も土佐清水市で住み、生計の一つに足摺黄金糖の栽培・製糖・販売を行っています。サトウキビは、無農薬で栽培されていて、雑草取りを小まめにしながら栽培、収穫し、製糖は、午前3時から始まり半日かけて行われ商品化されています。彼等の作る足摺黄金糖は、彼らに共感した地域おこし協力隊の元同僚、Iターン、Uターン、地元の農家、製糖組合の人達の協力を得て成り立っています。そんな彼らの黄金糖に関わる姿を追いかけた作品です。

成果・反響

- 土佐清水に住んでいて、土佐清水で砂糖を作っていることを初めて知った。
- 砂糖を作る工程が分かった。
- 足摺黄金糖を食べてみたいです。
- 足摺黄金糖を購入したい。
- 作品から土佐清水の風土が観れて良かった。
- 映画を観ているようだった。

●地元の人だけでなく、観光客にも作品を見てもらえ、足摺黄金糖を周知出来た。

助成を受けたことによってできたこと

野外での展示が、室内だけの展示に変わりましたが、大伸ばしの展示作品の制作と作品パネル貼りすることが出来ました。

今後に向けて

今後、撮影した作品を足して、来年以降、商品の足摺黄金糖と連動して、写真展を展開していく予定。



(助成額：8万5千96円)

フェスタ デ エスパニョール レストランテとステージ

団体名：フェスタ デ エスパニョール 実行委員会・日本障がい者フラメンコ普及協会・SACHIKOフラメンコスタジオ

開催期間：平成30年11月4日（日）

会場名：こうち旅広場

入場者数：約100人

事業の内容

おいしいスペイン料理を食べながらスペイン文化のステージ（ソーシャルダンス・フラメンコ・声楽）を見ることができます。

成果・反響

《観客からの感想より》

高知の表玄関、観光おもてなしの新拠点「とさてらす」と言った好立地で開催されたフラメンコショーに感動！観客はもとより、ステーションへ行き交う人々をも立ち留まらせる迫力と上級の演舞に魅了された。これが無料でのステージであるから驚く。

何よりも、フラメンコを通じて、「ノーマライゼーション社会」の実現を目指すとの、代表者の思い、願いをお聞きし、その情熱と行動力に圧倒された。

しかも、高知屈指の有名シェフの料理や出演者のお母さんの手作り菓子のコーナーも設けられ、正に至れり尽くせりの「おもてなし」が嬉しい。久々に夫婦そろっての楽しいひと時を過ごすことが出来た。

そして、いままでも、これからも、代表者の方の情熱の輪は、フラメンコそのものとなって、限りなく、力強く、ステップアップしていくものと確信している。

私たちも、一応援団として、代表者の活動にエールを贈り続けてまいります。

助成を受けたことによってできたこと

入場料を取らずに見ることができたので、どなたでも来ることができた。

高知県にはない一流のフラメンコと県内のフラメンコ共演ができて社交ダンスも歌曲も素晴らしい方々を集めることができた。

今後に向けて

来年も行っていきたいとの声がたくさんあったので、引き続きやっていきたい。



(助成額：30万円)

インスタント“KANTA”ポートレート展

団体名：バックヤードプロジェクト

開催期間：平成30年11月9日（金）～11月18日（日）

会場名：南はりまやビルディング302

入場者数：約90人

事業の内容

ポータブルであり、またその場で銀塩プリントを作ることができる、手製の箱カメラ。今回は、マレーシアから来高したJeffreyと高知在住の前田がこの箱カメラを使い、お互いの興味である「ある土地とそこに属する人」をテーマに、期間中作品を制作、同時に写真展を行いました。Jeffreyが台湾で撮影してきたポートレートの展示と平行して、高知県内11ヵ所（内高知市内4ヵ所）での写真とインタビュー中の音声なども日々追加展示されて行きました。

成果・反響

もともとは箱カメラというツールを通じて知り合ったJeffreyと前田ですが、そもそも各々がアイデンティティやルーツ、人の移動や土地などへの帰属意識を探るような作品を作っており、「インスタントKANTAポートレート」に繋がりました。それゆえ、今回は写真の展示と同時に、高知で2人がコラボレーションし、制作するという過程も大切でした。

期間中10日間、県内数ヵ所で計約150人の撮影、そしてインタビューを行いました。撮影からプリントまでが出来上がるプロセス、そしてプリントに興味を持って見ていただけたと思います。

インタビューではお名前とご出身、そして話し言葉について、伺いました。お渡しする銀塩プリントと、その方の個人的な歴史のお話を交換していただくというコンセプトでした。全ての方に伺えたわけではありませんが、旧姓やその苗字のルーツ、移動してきたのか、その場所で生まれてからずっといらっしゃるのか、どの方言をどの程度話すのか、などの問いを通じて、土地への帰属意識、人のある土地からまたある土地への移動などについて考察することができました。

トークイベントは2回、オープニングとクロージングを展示会場にて行いました。オープニングでは開催までの経緯、そして箱カメラについてのデモンストレーションなどを行い、クロージングでは今回のプロジェ

クトをどう進めたか、期間を終えての所感などをお話ししました。クロージングトークには現地で撮影させていただいた方々含め20人以上の方々がきて下さいました。

「土地への帰属、アイデンティティ」という改めて考える機会の少ないこのテーマについては、考えるいいきっかけになったという声をはじめ、私たちのトークを聞いて、ご自身のルーツのお話を共有してくださった方も何人かいらっしゃいました。箱カメラや印画紙が化学反応で写真になっていく過程に子供たちが興味を持ってくれたり、またお渡しした銀塩プリントを、通っているグループホームに持って行ってお友達に見せてうらやましがられたみたいです、など、モノとしての写真の力を再確認させられるようなコメントもありました。

また今回撮影に何うアポどりで宿毛観光市民ガイドの会さまにご協力いただいたのですが、その際宿毛で撮影した写真作品は、我々の展示後宿毛でも展示していただきました。また今回のプロジェクトについては、11月16日付高知新聞朝刊にご掲載いただきました。また、高知みらい科学館さま、薬工ミュージアムさまにもご協力いただいて撮影しました。ピンポイントで狭く深くだけではなく、間口の広いイベント・場所で撮影をさせていただき、より多くの方に今回のプロジェクトの存在を知っていただけたのではと思います。

助成を受けたことによってできたこと

助成をいただければそもそも実現しなかったこのプロジェクト。

Jeffreyとコラボレーションして高知でプロジェクトをやるというアイデアはもともとありましたが、マレーシアからきてもらって作家2人がプロジェクトをするには金銭面でのサポートが必要でした。

今回これまでKANTAという箱カメラを使ってアイデンティティを探るプロジェクトをやってきたJeffreyと一緒に作品を作ること、前田は自身の出身地である高知について再認識し、Jeffreyは前田を通じて高知を発見していくことができました。

今回、KOCHI ART PROJECTS 2018参加団体である宿毛観光市民ガイドの会さま、総合地球環境学研究所さま、なはり浦の会さまにも、地域の方に撮影、お話を何う上でご協力いただきました。また、メディア露出についても、KOCHI ART PROJECTSの一貫として行えたことで、テレビ取材をお受けできました。文化財団文芸賞作品集の表紙に、今回の展示の一部の写真を使っていたいただけたこともありがたく思います。

今後に向けて

今回のプロジェクトでは、限られた時間の中各地でいろんな方々と交流し、お話を伺い、撮影させていただくという部分も大事な要素でした。今後も取材撮影は続けていけたらと考えており、同時に成果物を見ていただける機会もいろんな形で作ってこうと考えています。今回のプロジェクトをデータベース化するウェブサイト (<https://kiokuchi.home.blog>) も制作中です。



(助成額：30万円)

わっしょい！わっしょい、わっしょい、祭りだ、わっしょい！ 「キネマM豊穡祭」

団体名：ウィークエンドキネマM

開催期間：平成30年11月10日（土）～11月11日（日）

会場名：キネマM前・おびさんロード

入場者数：【有料上映】166人 【無料（招待制の回）】70人

事業の内容

医食同源に基づいた和食給食を実践する保育園の取り組みを通し食育のあり方と食文化の未来を考えるドキュメンタリー映画『いただきます みそをつくるこどもたち』の上映を軸に、みそづくりワークショップや、本映画の主題歌を歌い一児の母でもある坂本美雨さん、エッセイストでフードコーディネーターでもある安藤和津さん、本映画の監督オオタヴィンさんをゲストに迎えた食育オープントークを開催し、文化と食を融合した「食育で子どもたちの未来を考える」イベントを実施。

成果・反響

《映画上映の感想より一部抜粋》

- これからの時代を生きる子どもたちが日々元気で幸せに生きる為に、食べるということがどれだけ大切かということを改めて強く感じ、日々どうやって（食べることをはじめ、その他の活動を）生きていくか、ものすごく考えさせられました。一つひとつのことを「〇〇だからできない」と考えるのか、「〇〇だったらできるかな」という視点で取り組んでいくのか、自分自身にも、そして関わる人たちにもそんな意識をもちながら向き合っていきたいと思いました。
- 素晴らしい映画でした。一人ひとりの思いが少し変わるだけで地球平和にも繋がりますね。食育の大切さ、まず自分自身から始めたいと思います。

《みそづくりワークショップの感想より一部抜粋》

- 子どもたちと一緒に参加しました。楽しく、思い出づくりにぴったりでした。太古の塩と長宗我部元親の大豆を加えたお味噌、完成が楽しみです。

《食育関係者の皆様からの感想より一部抜粋》

- 素晴らしいかったです。食に携わる仕事、3歳の娘を持つ親として、大変大きく根本的な気づきを頂いた事に感謝いたします。もう一度勉強をし直して、自分がまず、食生活を変えて、子どもたちのために、仕事に取組み、邁進したいと思います。
- 文化が産業につながり、地域の活力となっていく姿、形を高知で作りたいですね。

助成を受けたことによってできたこと

助成を受けたことによって、映画の上映のみに留まらず、映画鑑賞後にワークショップやトークイベントなどを組み合わせ、「食育」という一つのテーマに対して、多角的にアプローチすることができ、多くの方に幅広く楽しんでいただける事業とすることができた。特に、オープン形式で開催したトークイベントには、坂本美雨さん、安藤和津さん、オオタヴィン監督という世代・性別の異なるゲストの方をお呼びすることができ、それぞれの視点から「食育」についての話が繰り広げられ、「食育」の大切さを自分自身に置き換えて考えることができた、参加した多くの方からの反響があった。

今後に向けて

今回は「食育」という分野を取り上げたが、今後は、「農業」「ファッション」「医療」「教育」「宗教」「IT」「金融」など様々な分野において「わっしょい！」と題した祭りを開催し、将来的には、それぞれの分野の未来についてクロスオーバーに議論し合う場を設けていく。また、「食育」に関しては、協力団体

を募り「食育組合」を立ち上げ、県下において『いただきます みそをつくるこどもたち』の上映やワークショップなどを定期的に行っており、「食育で子どもたちの未来を考える・高知県」のさらなる推進を目指す。



(助成額：30万円)

防災ママカフェ+「すさきでおどろう。かぞくでおどろう。」パフォーマンスワークショップ

団体名：すさき芸術のまちづくり実行委員会

開催期間：平成30年12月1日（土）～ 12月9日（日）

会場名：須崎市役所ほか

入場者数：【防災ママカフェ】18組37人（おとな：19人、こども：18人）
【すさきでおどろう。家族でおどろう。】109人

事業の内容

12/1かもんまゆ氏を迎え、[ママのための防災ワークショップ]、[防災食試作・試食]の2部で開催。

[第1部]被災地ママの声を知恵の詰まった防災ブックや、映像、スライドを使ったレクチャー。

[第2部]加熱剤を使って実際に親子で作って食べる。

「すさきでおどろう。かぞくでおどろう。」親子を対象にダンスを楽しみながら、身体感覚を研ぎ澄ます。

12/5、12/7「カフェでダンスがオーダーできます！」飲食店テーブルサイドでオーダーを取り、即興でダンス披露。12/6「ママのためのゆるゆるストレッチこうざ」育児・家事に追われる母親対象のストレッチ講座。12/8「親子でからだあそび」砂浜で親子のスキンシップ、12//9「家族でディスコ」文化会館の一室をディスコに見立て、家族でダンス。

成果・反響

《感想より一部抜粋》

- 勉強になった。実践したくなった。
- ハード面を揃えるよりも、こどものソフト面、自分自身の心の強さをしっかりさせようと思った。
- 日頃から防災についての意識を持ち続けていることが大切だと思った。
- もしもの時のシュミレーションを親子で考えようと思った。
- 実際の津波の映像をみて、涙がでそうになるくらい辛かった。こどもの命を守るために備えたいと思った。
- 防備のために帰りに少しでも買ってかえります。
- 友人にすすめたい。

- 今後もこういった取り組みがあったら参加したい。

《すさきでおどろう。家族でおどろう。》

それぞれのプログラムで十分な参加者がを迎え、ダンスパフォーマンスの楽しさを伝えられた。身近な場所で踊る機会を設けたことで、新鮮な感覚を呼び、好評をえた。

助成を受けたことによってできたこと

スマートサバイバープロジェクト特別講師・かもんまゆさん、ダンスパフォーマー/振付師・ホナガヨウコさんといった、プロフェッショナルなお二方を講師として迎え、指導やワークショップを通じ、小さいこどもを持つ保護者に災害へ備える意識の更新と、自分自身の身体と向き合い、身体を動かすことの楽しさや大切さを伝える機会を提供することができた。また多くの方にパフォーミングアートの体験の場を提供することができた。概要的な災害対策ではなく、子育て世代を対象を絞った実践的な知識を広めることができた。

今後に向けて

被災時に小さい子供を持つ母親の避難の切実さをより多くの人に伝えるため、継続的に取り組みたい。知識だけでも身体能力だけでも自分の子どもを守ることはできない。そのことをより効果的に示す総合的な手法を考えたい。また、文化・アートが今日の社会と接続した営為であることをアピールしたい。



(助成額：30万円)

アートツーリズム ～ ゲージュツ遍路in大月町 ～

団体名：しこくゲージュツ遍路座

開催期間：①平成30年12月8日（土） ②平成30年12月15日（土）

会場名：①高知県大月町添ノ川地区（集合・解散：大月町農村環境改善センター）
②大阪府大阪市此花区 世界 / FIGYA

入場者数：①49人 ②35人

事業の内容

四国八十八箇所の番外札所・月山神社がある高知県大月町に、それぞれの現代的な芸・術（映像・美術・建築・音楽・伝統芸能等）を持った「ゲージュツ遍路」が訪れ（関東・関西・四国）、その土地の歴史や風土と絡み合った表現・出来事を創り、地域PRのためのイベントを実施。（作家による大月町での滞在・作品制作・発表）。また、そこで得た活動成果を元に、大阪・此花区にてPRイベント（アートスペースでの「大月町」成果発表イベント）を実施し、地域間ネットワークを促進する。

成果・反響

伝統芸能への参加、地域愛を掘り起こす住民インタビュー、住民とタイアップした作品制作等の活動を通じ、作家と地域住民との密な交流が生まれた。また、自然資源や廃棄物を組み合わせたアート作品、四季の

移り変わりを「集落の魅力」として捉えた映像作品、耕作放棄地をコミュニケーションの場として活用する建築的視点からの提案等を通じ、場の新たな演出・魅力・活用方法を提示した。パフォーマンス作品の披露では、論理や説明の枠を超えた一見すると解りづらい表現であったが、地域における「多様な価値観を育む機会」や「表現の幅を広げる」「感性を刺激する」という意味合いで捉えると、1つの実験が成立したと思われる。以上、8人の作家を通じた表現や地域住民との交流により、地域を深く見つめる機会・場の創造に繋がった。

本企画を通じ、初めて大月町を訪問した5名の関西在住作家は、大月町を含む高知の多様な文化・芸術ゾーンとの交流を行う中で高知の魅力に触れ、SNSや口コミなどを通じて、大月町や高知県の魅力を発信した。大阪・此花区で実施した報告会では、取り組みの魅力や可能性を、直接来場者に訴求。高知を訪問したいという声もあり、継続して高知の魅力をPRできるハブ拠点として機能させることで、高知の文化・芸術シーンを底上げしていく「関係人口」に繋げていきたい。

助成を受けたことによってできたこと

「KOCHI ART PROJECTS 2018」の採択・参加にともなう予算拡充によって、これまで四国にゆかりのあるメンバーのみで実施してきた企画・プロジェクトに、ジャンル・地域を横断した取り組みを付加することができ、作家招聘の選択肢が増えた。

特筆すべきは、この取り組みをきっかけにはじめて大月町に訪れた大阪在住の中田粥氏が、2019年春の大月町移住を進めていること。

今後に向けて

引き続き次年度以降も、大月町における「地域×文化・芸術」の取り組みを深めていきたい意向。



(助成額：30万円)

地域の「ための」民謡づくりー「たらしめことば」の語りとアートの実践

団体名：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

開催期間：平成30年12月13日（木）～ 12月15日（土）

会場名：NPO法人ぬた守る会事務所（旧公民館）、怒田集落ふるさと館

入場者数：50人

事業の内容

「カンジャウネ」や「ナキャシキ」という言葉をご存知だろうか？

この言葉を聞いて、笑う人や恥ずかしがる人がある。本事業で実施する高知県長岡郡大豊町怒田集落の住民たちだ。地域固有の言葉には地域ならではの喜びや記憶がある。本事業では、この「地域を地域たらしめる言葉（たらしめことば）」を紡いで、新しい民謡づくりを実施したい。地域の「ための」アート実践の試み

である。

成果・反響

本事業では、地域住民やアーティスト、研究者、学生が協働して、地域の「たらしめことば」の収集を通して、「屋号うた」、「カンジャウネのうた」、「怒田しあわせ音頭」、「怒田のめぐみ」の4つの歌を製作した。「屋号うた」では現存する住宅以外にも廃屋や田畑などかつて存在した屋号を含めて約80近い屋号を収集し、それら屋号すべてを歌詞として残した。60代の女性は、20個ほど知らない屋号が存在していることに驚いており、また、他の女性は屋号うたが盆踊りで踊れるようなメロディであるため、2019年の盆踊りで踊れることを楽しみにしている。歌作りというアート製作を通して、各人の記憶を掘り起こし、一緒に笑いながら歌うことができたことが、本事業の大きな成果といえる。

助成を受けたことによってできたこと

高知県芸術祭の助成を受けて、高知県で活動する方々との繋がりができた。本年度の助成者でもある前田実津氏、Jeffrey氏が怒田集落を訪問し、自作カメラでの撮影を行った。これは当初予定していなかったことでもあり、助成を受けたことで新たな企画が芽生えた。さらに、高知県文化財団のチラシを見た四万十町の地域おこし協力隊の方がワークショップに参加するなど、助成を受けたことで人脈が広がった。また、所属する機関での企画・活動の実施に伴う合意形成においても効果を発揮しており、予算の補填に大いに貢献した。

今後に向けて

本事業では、地域住民と一緒に「屋号うた」、「カンジャウネのうた」、「怒田しあわせ音頭」、「怒田のめぐみ」の4つの歌を作成して歌った。ここでの成果を楽譜や音階を付け加えていくことでたらしめことばの新たな記録の方法として提示したい。また、聞き書きをもとにした、「カンジャウネのうた」や「怒田のめぐみ」は、今後さらに応用して増やすことも可能である。最後に、2019年夏に予定している盆踊りまでに振り付けも考慮した完成版を作り、みんなで歌って踊れる機会を目指す。



(助成額：15万円)

第68回高知県芸術祭「KOCHI ART PROJECTS 2018」 事業報告会

開催日：平成31年1月27日（日）
会 場：ちより街テラス3階会議室1.2
参加者：45名（報告者含む）

<プログラム>

1. あいさつ 高知県芸術祭執行委員長 新納朋代
芸術祭執行委員のご紹介
2. 助成事業報告（15団体）
3. 意見交換

～議事抄録～

① 古民家Art&Live

この「古民家Art&Live」は昨年も行わせていただきまして、大きな反響がありましたので今年もやってみたいということで開催いたしました。なはり浦の会は、20年程前から奈半利の登録有形文化財を活用して、色々な催しやまちづくり、まちおこしなどを行っている団体です。今年の内容としては古民家・町並みとアートやライブとのコラボレーションイベントということで行わせていただきました。アートとしては県内外で活躍する9名の現代アート作家の作品を登録有形文化財である古民家で展示しました。会場と会場の道中には多くの登録有形文化財、奈半利は13カ所37あります。それを見てもらいながら町並み散策もしてもらいたいということで、歩いて行けるような形にしております。ライブとしては元いちむじんの宇高さんがやられている『gentle』というユニットのライブを濱田邸という一番僕らが自慢できる、すごくいい形で残っている古民家がありますので、そこでやっていただきました。期間は平成30年9月16日から30日の約2週間行いました。

アート会場は高田屋、なはりの郷、増田屋、旧野村茂久馬邸あと藤村製絲の5カ所とライブは濱田邸の1カ所、全体で6カ所で行いまして、全部登録有形文化財です。実際にどういう形で行ったかといいますと、高田屋は本当に古いところで今は古民家カフェをやっております、ここでは都築さんの作品をはじめ、蔵の前や、屋内も掛け軸や立体作品を展示しました。高田屋の道を挟んだ前にある、なはりの郷は、現在は集落活動センターとして活躍しております。そこの中は現代アートで、絵だけではなく映像の作品もあり、本当にたくさんの若い方の力を感じるような作品もたくさん展示していただきました。増田屋はもともと酒蔵や質屋、呉服店などを営んでおりました。今見るとあまり外観は良くないですが、中は本当にいい形になっておりまして、まだ物置状態のところもあるのですが、そこをうまく活用して絵を展示したり、2階に行くところが螺旋階段になっていて、そこは本当にモダンな造りなので、その上がった2階でも作品が見れるということになっています。旧野村茂久馬邸は、土佐の交通王と言われる野村茂久馬の生家です。2階は、ふすまを全部開けると大きな広間になってまして、そこで大きな広間をいかした作品などを展示しました。藤村製絲は製糸会社です。ここでは映像や大きなキャンバスの絵などを展示をしました。

ライブは濱田邸。ここは庭もきれいなので、庭からでも見れるということで、二胡とクラシックギターの

演奏を行いました。

良かった点ですが、昨年行ったときは都築さんお一人の様々な作品の展示を行ったのですが、今年は企画に賛同してくださった若手アーティストが加わり全9名の作品を展示できました。絵だけではなく立体のものや映像などたくさんの作品を一気に見れるイベントとなりました。会場も1つ増えました。去年開催したことによって「うちも使ってくれ」というふうな会場ができました。あとは、たくさんの若いアーティストが参加してくださったことによって若い人の視点、「こういうこともできるがや、こういうことも来年できるな」というふうな次のさらなる可能性も知ることができました。

反省点としては、前回もっと町にお金落ちるようにしたら良いのではないかというご意見いただきましたので、やはりそれは大事だなと思ってたのですが、今有り難いことに奈半利町はふるさと納税で大変忙しく、各お店も今までランチの営業をしていたのですが、ランチをやめてふるさと納税の作業をしているという状況なので、なかなかお昼のお客さん呼び込めませんでした。これは課題かなと思います。あと田舎なので人材不足です。お店も人がいないので営業できないという状況もあり、余り宣伝してもらっても困るということも言われましたので、とりあえず来られたお客さんがただご飯を食べるところが分かるようなマップは作りました。

気付きとしては、若手アーティストと関わることによって高知県の芸術事情を知る機会となりました。ということかということ、高知県には色々なギャラリーが昔は結構あったようなのですが、今は本当に少なくなってきたということで、「こういう自分の作品を発表する場所が余りないがよね」ということを言われました。自分達も普段色々作っているが、発表する場所がないということで、お互い良いメリットもあり、今後どんどんこれを発展させていく可能性もあるので、発展させていかなければいけないというふうに感じました。やはり芸術を身近に触れる機会というのは本当にはない。特に田舎のほうはないので、そういうのも含めて色々なことを感じることができました。

アンケートですが、多くの方が今回参加してくださりましたが、アンケートの回収は少なかったです。全体でいくとやはり女性のほうが多く、年齢は50代60代が多かったです。そして、来られる方は高知市内が多かったです。感想としては良いというのは92%。多くの方から本当に良い感触を得ております。

成果、反響としては、昨年から、またやってほしいというのがたくさんあったので、開催できたのが本当に良かったなと思います。あとは、町の至るところで皆さんの親切に出会えて良かったという声があったところです。普段は奈半利町は過疎化で人がいなくて歩いている人が少ないですが、その中でも出会えて、「ちょっと次どこですかね」ということで聞いたら優しく答えてくれたということもあり、奈半利町の町民性も感じてもらえたかなというふうに思います。あとは、やはり古民家で行うというのが大きな意味があったと思います。古民家ファンと芸術ファンがお互いを知れたということですね。お客さんもアーティストの皆さんも本当に来年またやりたい、やらせてほしいという声があったので、ぜひ開催したいと思います。

□質疑応答

Q：役場の協力で看板を作っていたという報告があったのですが、なかなか交渉も大変だったと思うんですけど、ここに来ている他の団体の皆さんも開催地の自治体の協力があるとすごく助かることあるかと思います。何かそういう協力を得るコツがありましたら教えてください。

A：浦の会は約20年やっていて、普段から色々絡みもあり町長でも一般の住民としての繋がりもあるので。小さな3,000人くらいの町なので、他の大きな高知市内とかではできないことが簡単に言えたりす



るというのはあると思います。あとはやはり、ずっと継続しているというのが大きいところかなと思います。

□意見

●継続して若手アーティストさんの活躍の場として今後も続けていっていただけるようにと願ってます。そのときに若手の方のノウハウというか、パワーというのをどう使うかなと思ったときに、例えば小学校、中学校などで、ワークショップをする、または、子ども、児童、生徒の方に来ていただいて、そこで何か一つ交流が生まれるようなことも企画されたらどうかと思いました。

② 八畝AutumnFesta2018 — 八畝に酔い この ふるさと に会う —

私たちは、大豊町の八畝という梶ヶ森のすぐ下の集落で2016年から棚田で芝居を上演するなんていうようなプロジェクトをやっております。八畝AutumnFestaの実行委員会は、大豊シャクヤクの会、そのシャクヤクの会をサポートするような形で高知大学農学部学生MBという団体、人と地域の研究所、八畝の婦人会、おさらい会という劇団といった幾つかの団体で構成しております。まず、八畝の位置ですが、ほぼ徳島県の県境に近い場所です。豊永駅の所から山へ上がっていったらちょうど八畝という集落となっています。八畝の眺望といいますと、ほぼ棚田ばかりの眺望で、この一番大きい棚田で演劇を上演したりするわけです。乳イチョウと言われる樹齢500年のイチョウや観音堂といった自然の風景のいい集落です。

八畝の現状ですが、現在33世帯77人の小集落です。こういう集落ですので、棚田の里として知られておりまして、多くの写真家が訪れております。田植え時や秋のお米が実った頃にはたくさん来ております。

アートと食農体験による創造的過疎・創造農村の試行、アートを核にしたグリーン・ツーリズムの実現などを狙いとして私たちは組んでおり、9月23日に実施した催しは、3本の演劇の上演と地元食材による交流会、地キビの収穫体験などというものを組んでみました。

今回は小笠原郎という八畝で一番大きいお屋敷を会場にして作品を作りました。小道具もここのおうちの以前からあるものを利用させてもらってございました。

それから、交流会では、地元のお母さんたちによる手料理をだしたり、大学生たちが中心に育てた地キビによる焼酎をふるまいました。

収穫体験は、今年は台風や豪雨の影響でなかなか早く収穫できず、地キビの乾燥が遅れたので、収穫した上で、その場でボン菓子で食べてみようということを狙ったんですけど、ボン菓子がうまくできずに、それから脱粒も十分できないということもあったので諦めてお米を一升回してボン菓子にして皆さんに食べていただいたというような形で変更した次第でした。

また、兵庫県で活動している若い劇団が、「羅生門」をやりたいということでしたので、お堂の前を会場として上演しました。彼らの上演スタイルとして割とパークッションをたたいてやるスタイルがあります。このお堂の中には大きな太鼓が納められておりまして、八畝の夏の終わりのある夕方から、その大きな太鼓をたたいて皆が集まるというようなお祭りをしていたということもあって、ぜひここのお堂の前で彼らの太鼓の音を響かせてみたいというような思いがあり上演したことでした。

それから、「生きてゐる小平次」という作品を上演しました。例年は、この棚田にステージを組んで行っていたのですが、せっかく棚田でやるのにも関わらず、何かステージを組んでしまうと逆に劇場と余り変わらない風景になってしまうので、お客さんに取り囲まれながらやってみようということで作品を作ってみました。皆さん1人1人にミカン箱を手に会場に集まっていたいて上演しました。夕方の日が落ちる手前から皆さんに集まっていたいて、日がどっぴり落ちた



頃には上演も終わっているというような形の上演でした。作品は大正時代に作られた作品なのですが、割と分かりやすいシンプルで、歌舞伎で「小平次もの」というジャンルがあるんですけど、殺されても殺されてもやっぱり出てくる幽霊のような男が主人公です。

企画の反省ですが、今年は村丸ごと劇場ということで、皆さんに紹介したいところを中心に作品を組んでいたことでした。当初、造形作家を招いて村の風景の中にオブジェづくりということを考えていたのですが、スケジュールの都合上断念いたしました。

また、3本の上演、棚田やお屋敷の風景などはお客さん達に喜んでいただけたかと思います。今回も学生たちに頑張っていたいたのですが、一方で学生たち自身の活動もありまして、一部の学生ボランティアにすごく負担が掛かったような部分もありました。とは言え、7団体からなる総勢30名の実行委員会でしたので、運営は割ときちっとできたかなというふうに思っております。大豊町の行政も大分関わってくれるようになり、良かったかなと思いました。

□質疑応答

Q：私は大豊の怒田で活動をしておりまして、八畝は向かいなのでごく馴染みがあります。行政と一緒に活動するのはなかなか難しいが実践されている。自分達だけではなくて、色々な人と一緒にやって作っていくのが重要なのかなと思いました。私も怒田で思うのですが、その辺が難しいなと感じています。今後どのように広げていくのか、他の人達に伝えていくのか、もし何かアイデアがあったら教えてください。

A：大豊町も随分広いので、八畝や怒田は、行政としてはなかなか注目してくれなかったりするケースが多いかと思います。ですが、とにかく町の担当の方を招いて、全部見てもらいました。そういうことで町の理解をちょっとずつ進めていこうと。昨年も一昨年も行政の方には入っていただいて見ていただいています。町としても、これは重要なことだということを理解していただけたら、また何らかの支援もあり得るかなというように思っています。ここには大豊町のバスも無料で出してくれるようになってますので。もうたった70人余りしかいない集落なので、消滅集落にほぼ近いような感じがあるのでアートだけで活性化というのは難しいと思うのですが、あとはどういうふうにこの集落を維持するかという、それを私たち自身が楽しみながら、勉強しながら次へどう繋げていくかということを頑張っていてやってますので、思いとしてはとにかく地域の人たちに喜んでもらうことがやっぱり重要だなと思ってやっております。

③ Shikoku サイハテ Toropical 2018

Shikoku サイハテ Tropicalは秋に開催しているイベントになります。年2回、『Shikoku サイハテ』は秋に開催している有料イベントで『竜串トロピカル』は海辺の辺りでフリーイベントの野外イベントになっております。今回の助成は『Shikoku サイハテ Tropical』の有料イベントで使わせていただきました。

会場は海のギャラリーという貝類の展示会場です。横の芝生の広場のほうで音楽とマーケットを開催しました。出店の方々は地元のものを使った作品などを作られてる作家さんのお店で、お客様に楽しんでいただけるような工夫をしております。ステージのほうでは一日中ライブのほうを開催しておりまして、出演者の方は地元のミュージシャンの方や県外のミュージシャンの方にも声を掛けさせていただいて、演奏していただいております。

今回で4年目のイベントになるのですが、夏に開催してるフリーイベントの竜串トロピカルでは無料ということもあり、たくさんのご来場者の方にお越しいただいてるのですが、有料イベントである今回のShikoku サイハテ Tropicalに関しましては、お金をお支払いいただいてイベントを楽しんでいただくというスタイルが、まだ土佐清水のほうにも馴染みをいただいてない企画でありまして、その辺りを定着していける

ような形で企画ができればなということで頑張っております。

今回、助成していただいたお金で音響設備の充実やボランティア経費などの事前の企画の立案がしやすくなりました。当日の運営のほうも、準備や設営も企画がきちんとできていたお陰で、スムーズに行うことができました。毎年開催しているということで、少しずつなんですけれども地元の方にも知っていただくことができました。今回ボランティアスタッフも地元の若い方や年配のボランティアスタッフの方にもお越しいただくことができました。ボランティアの反省点なのですが、当日に急遽来られるボランティアの方がいらっしやいまして、そのときの対応をイベントとしてきちんと考えることができてなかったのも、その辺りはそういうことが起きた場合にどういうふうな対処をすればいいかということの話し合いを事前にできればと思っています。

音楽、ライブが主となってるイベントなのですが、県外アーティストの方に声掛けをして出演していただくことで、高知県の土佐清水市という場所を県外の方にも知っていただくような機会になればということで、企画させてもらってます。

今後に向けてですが、スタッフも今のところ少ないので、地元の方への発信、色々やりたいことも考えてはいるのですが、近くの施設と連携を取ることや、宿泊施設などにも県外から来ていただいた方に泊まっていたような仕組みを作っていければと思っています。

また、土佐清水には豊かな自然がたくさん残っています。地元の方にとっては当たり前にある景色だと思いますが、竜串トロピカルのスタッフは移住者がメインとなった団体となっておりますので、移住してきた



人は自然の素晴らしさというのをすごく実感しているので、そういったところもイベントを通じて発信していければと思います。

今回のイベントでは、実現できなかったのですが、地元の高中生や中学生の若い世代の方にも色々な音楽や作品を若いうちに知っていただいて、今後若い方の将来を考えるきっかけづくりというところもできていければと思います。

地域での発信といたしまして、行政のほうにも働き掛けを昨年初めてさせていただきました。地元の方にご協力をいただきまして、役所のほうとお話をさせていただく機会を設けさせていただいて、少しずつですが、地域にも馴染んでいけるようなイベントにしていきたいと思っています。

□意見

- 地元の中学校などの吹奏楽部を使うなど、そういう世代も巻き込んだらイベント自体が若返ってくるかなという気がしました。

- 子どもたちが出演できるような企画を挟みますとおじいちゃん、おばあちゃんが来ます。若人受けということだけではなくて、地域を動かすということは、おじいちゃん、おばあちゃんにも参加していただくということです。趣旨的な中から、筋から外れるかも分かりませんが、子供たちが出演できる何かを挟んでいただければいいのかなというふうな気はいたします。

④ 打楽器の祭典Vol.4

打楽器の祭典Vol.4というタイトルで、昨年10月13日土曜日に1時30分から約2時間の音楽イベントを行いました。入場は無料でした。

概要としては、打楽器にスポットを当てた音楽イベントを昨年度より行って来ましたが、その最終回をこの助成金を活用して行ったものです。

このイベントの企画に当たっては、所沢在住のマリンバ奏者の市川みどりさんに関わっていただき、立川番所保存会との共同の企画イベントでありました。

市川さんには、出演者の手配を担っていただき、イベントの運営やプロモーションについては、当該保存会が行う形で実施いたしました。

1回目は、市川みどりさんと宮本小葉実さんのマリンバとピアノのコンサートを行いました。

2回目は、佐藤秀嗣さんと市川心之輔さんとで和太鼓とドラムの異色のコラボイベントを行いました。こちらは、2018年のKOCHIE ART PROJECT の助成金を活用させて頂いて開催いたしました。

3回目は、昨年の4月にスティールパンの伊澤さん、パーカッションの小川さん、ピアノの菅原さんの3名によって、スティールパンの魅力を紹介するイベントを行いました。

最終回の4回目は、昨年10月に開催し、これまで出演した奏者に集まっていただき開催しました。また、昨年は、参勤交代道の300周年に当たる年でしたので、その記念イベントにもなりました。フィナーレにふさわしく来場者が過去最高となり、会場はほぼ満杯となりました。

旧立川番所書院の魅力とアーティストによる演奏が多くの来場者に感動を与え、盛会に終えることができたと思います。

準備に当たり良かったことは、これまで出演していただいた奏者を全員確保することができたことでした。また、地元の有志のボランティアにより、舞台設置場所の整地が行われ経費の節減が行われたことやこのイベントを通じて地域力が高まったことなどです。

苦労した点・反省点は、7月豪雨で甚大な被害を受けたことから、このまま開催をして良いのかとの議論もありましたが、話し合いの結果、実施することとなりました。企画会議や準備作業の実施に当たっては、多くの方が被災を受けていたため、大きな負担となり大変苦労したように思います。逆にこのような困難を乗り越えたことで地域力が高まったようにも思います。

実施当日で良かったことは、アットホームな雰囲気で行え、ここでしかできない公演ができたことです。演奏者と地域の方が和気あいあいと行えたことが良かったかと思っています。

反省点については、アンケートの配布が遅れたことや筆記用具が足りないなど、運営に不備があったことです。

実施体制について良かったことは、これまでの実施経験があったので、準備から公演までスムーズに行えたことです。また、これまで広報が十分に行えなかったのですが、県内各所、また四国内のサービスエリアへの設置や、県内の情報誌などにも掲載できたことから、これまで少なかった高知市、南国市から多数お越しいただいたほか、岡山、愛媛といった県外からもお越しいただくことができました。

その他、良かったことですが、アンケートでは、「国の重要文化財、バラエティに富んだ演奏が日常を忘れさせてくれた。」という評価が多数あり、来場された方に大変満足してもらえたことだと思います。また、旧立川番所書院の下にある御殿茶屋の売り上げも上げることができました。そして、この「打楽器の祭典」がきっかけとなり、集落活動センターの設立に向けた取り組みが始まったことなどがあります。開催時間についても、今までは、ライトアップした旧立川番所書院の魅力と音楽を楽しんでいただこうと行って来ましたが、アンケートでは、昼間でなければ不安で来れないとの意見もあり、開催時間についても考慮する必要があることがわかりました。

2年にわたり、「打楽器の祭典」を行って来ましたが、どの回も来場の皆様に良かったとの評価をいただき、たくさんの元気をいただいたところでもあります。そのいただいた元気が地域の力となり集落活動センターを設置し、新たな取り組みが始まったことなど、大きな成果に繋がったかと思っています。今後について



も、国の重要文化財である旧立川番所書院を活用したイベントを行っていききたいと思います。

□質疑応答

Q：これから継続していかれるといった発表がございましたが、この「KOCHI ART PROJECTS」の補助金がない場合、何か資金を集める方法など、そういったことは今後考えておられますでしょうか。

A：集落活動センターの運営資金というのが、補助金的なもので多少あるかと思います。また、今までこの秋の祭典は、最初のコンセプトで無料化でやるっていうのがありましたので、これを有料にするという点もあるかなとは思っています。それと、町のほうにも、こういった活動をするのを文化財の有効利用にもなりますので、そういった趣旨も分かっていたら、補助的なもの、そういった働きかけをするっていうようなことも考えております。

□意見

●少子高齢化が進み、過疎化が進んだ地域で、このような活動を展開するのは相当難しいことかと思えます。国指定重要文化財の旧立川番所書院を長年見てきておりますが、3年間の芸術活動を見てきて、歴史的建造物の内部や外部でこのような芸術活動ができるのだと、再認識いたしました。歴史的建造物の重厚さと音楽の力が加わるとあのような感動的な空間と時間が醸成されるのかと思いました。演奏前の時間を活用して30分でもいいので、歴史的建造物の歴史や建造物の特徴を解説していただくと文化財の価値が理解できます。

⑤ 全国映連フェスティバル高知×シネマの食堂 “映画と地域の未来” について考える

事業の概要としましては、昨年、全国映画サークルが1年に1度、一堂に会する全国映連フェスティバルが高知で開催されることが決定いたしました。その際に時期がたまたま同じだったので、毎年行っている高知の映画上映団体と人気飲食店が運営しておりますシネマの食堂と共同でイベントを開催して、地域の各団体や全国の映画ファンとの交流の場を提供しようというのが事業の目的でした。

まず、10月13日に映画「君が君で君だ」という映画を上映いたしました。普段私どもの団体のメインのお客様層というのがシニア層になるのですが、今回は若者向けの映画を上映して新たな客層の取り込みや、若手スタッフの育成、あと、全国からお客様を招致するので会場で郷土料理を販売して、地域と映画の文化を繋げようというのを目的にしました。

次に2つ目のイベントは、映画の宣伝プロデューサー、渡辺尊俊さんの講演会というのを開催いたしました。こちらは既存メンバーの知識向上を目的として開催しております。

3つ目は、全国の映画上映団体の取り組みの交流会をしようということになりました。高知の映画上映団体のそれぞれ課題を持っていますので、こちらの全国の映画上映団体と一緒に話し合って改善していこうというのを目的にしております。

映画「君が君で君だ」の上映会ではこちらの3つの成果があったかなと思っています。まず、学生のお客様に上映会の魅力を伝えることができました。普段はお客様のメイン層であるシニア層向けの作品を上映することが多いのですが、若者に響く作品上映に挑戦しまして、結果として当日、学生服のお客様や学生証を提示して割引で鑑賞するお客様が多く見受けられました。そして2つ目が、高知の食文化と自主上映活動の懸け橋を行うことができました。県外のお客様を呼び込み、田舎寿司や早生みかん、直七みかん等の販売を行いながら映画上映を行うことで、高知の自主上映文化、食文化の魅力をお伝えすることができたかなと思っています。3つ目は、舞台挨拶の開催により、映画の理解を深めることができました。当日、映画の宣伝プロデューサーの渡辺尊俊さんの舞台挨拶をしてたんですけども、「君が君で君だ」という映画が、3

人の男性が一人の女性を10年間愛し続けてその女性の愛した男性になりきって、10年間を過ごすという、ちょっと変わった映画だったので、全国から集まった映画ファンの方には、これは映画なのかという意見もあり若者の見たい映画と映画ファンの見たい映画っていうのの差があったかなと思いました。その差を宣伝プロデューサーの舞台挨拶によって補足して、若者の上映会と映画ファンの望む上映会の懸け橋をすることができたかなと思っています。



映画宣伝プロデューサー渡辺尊俊さんの講演会のテーマは、「他では聞けない宣伝プロデューサーの裏側～これからの映画文化に何が必要か?～」でお話いただきました。成果は、まず、後進育成についてヒントを得ることができたことです。この講演会は、学生にもご来場いただきたくて、広く声を掛けたのですが、なかなか動員が伸びませんでした。そのことを渡辺尊俊さんにご相談したところ、「どうすれば若者に、自分たちの見せたいものを届けられるのか」というテーマで講演をしてもらうことができました、私たちの自主上映団体が、自分たちの活動を見つめ直すことができました。参加者は熱意を持ってイベント活動している方が多かったのですが、ご年配の方が多かったので、SNS等に抵抗があるという方が多かったです。どんなにいい活動も「見せたい」と「見たい」との差が埋まらなければ、お客様には届かないという講演会のお話によって、それぞれの活動を見つめ直したという感想を多くいただきました。

映画のサークルの取り組み交流会では全国の団体、47名ぐらいの方が集まってそれぞれの活動を報告したりとか議論をしたりしました。成果の1つ目は各団体の問題解決の糸口を見つけることができました。各団体の取組を発表して議論することで、映画文化の繁栄に向け、全国のサークルが繋がり、各々の活動のヒントを得ることができました。2つ目としましては、プロの視点から活動へのヒントをもらうことができました。発表、議論の後に同席していただいた渡辺尊俊さんにご意見をもらうことができましたので、各サークルの議論から、さらに一歩踏み込んだ視点で活動を見直すことができました。

反響ですが、映画の上映会では「作家の熱意が感じられた」という50代の男性の声や10代の方から「池松さん最高でした」という声などをいただきました。また講演会では、「どうすれば若者に映画文化に触れてもらえるのか、ヒントを得ることができた」、「大変面白かった」などの声をいただいております。全体としては「開催される方の熱意が伝わりました」という声をいただいて、すごく嬉しかったです。あと、県外のお客様も多かったので、色々な団体がネットワークを作って取り組むという高知のスタイルをあまり見たことがなく、そこをすごく褒めていただきました。

反省点は、準備段階としましては、共催であるシネマの食堂は参加団体がすごく多くて情報を集めるのに時間が掛かってしまって、宣伝物作成から配布まで時間を要しました。今年度からは早めに決まってる上映会に情報を絞ることも検討すべきだと感じました。当日の運営についても、全国からの参加者と県内の参加者で配布物等が違ったため、受付で多少の混乱がありました。準備だけでなく、当日の対応でも他団体の協力を積極的に要請すべきであったかなと思っています。体制としましては、学生にも当日イベントスタッフとして参加していただき、普段の上映会より学生のお客様も多かったのですが、県内の学校にも協力団体として参加してもらえれば、より学生へ広く働きかけることができたかなと感じております。

今回の助成を受けたからこそできたことですが、今回の助成を受けることで、ゲストの招聘や普段のメイン層ではない若者にも響く作品の上映に挑戦することができました。また、講演会と取り組み交流会の参加費を無料にすることができました。

今後に向けてですが、ゲストでお呼びした宣伝プロデューサー渡辺尊俊さんより、学生の映画上映を渡辺さんと、とさりゅう・ピクチャーズでサポートしようのご提案をいただきましたので、この企画を実現に向けて参りたいと思います。今回のイベントによりできたご縁を大切にして、後進育成への流れを作ってまいります。

□質疑応答

Q：「KOCHI ART PROJECTS」で助成金を出すということになりますと、地域活性、地域の芸術文化をどのように今後発展させ一般の人たちに浸透させて、地域の方々が楽しく住みやすく生きていける地域を作ろうじゃないかというふうなことが、実は基本のフォーマットとしてあるわけですので、各映画団体の取り組みについて有効であった、詳しくは映画文化の今後について、どう活動すればいいのかということであったということのお話は分かるのですが、表題にあります地域活性化へ繋げるという意味についての今後の実際の取り組みの評価と、特に「君が君で君だ」という映画については、高知の地域とか人であるとか文化芸術であるとか、そういうものには関係のないところでの映画、若者向けの映画ということでしたので、今後の取り組む方向としてどういう形でお考えなのかをお聞かせいただけたら有り難いです。

A：宣伝プロデューサーの渡辺尊俊さんから地域の学生たちと一緒に上映会をやってみたらどうかという提案をいただきました。映画を見る環境がなかなか整っていないところが高知の課題としてあるのかなと思っておりますので、若者を取り込まなければ絶対衰退していくという思いがあります。やはり上映会、映画館に行くだけではなく、自分で運営するという楽しさを知ってもらいたいということで、渡辺尊俊さんと学生たちが自分たちで映画を上映してみるという企画を秋にやってみたいと思っています。

⑥ 宿毛のお宝アーカイブスプロジェクト

私たち宿毛観光市民ガイドの会は発足してまだ1年という、スタートラインに立ったばかりの生まれただの会です。会員は現在、二十数名います。私たちは今回の事業で宿毛のお宝アーカイブスプロジェクトというテーマを設定し、昨年10月16日から12月8日の約2カ月間に5回のイベントを開催するというハードなスケジュールを実施しました。

プロジェクトは2つあり、まず1つ目は写真展です。写真展は日程を変えて2つの会場で開催しました。まず初めは宿毛で、開催期間は10月16日から10月21日の5日間。会場は宿毛まちのえき林邸。入場者数は延べ397人でした。林邸は昨年4月にリニューアルオープンしたばかりで、親子3代続けて大臣を輩出した高知県でも珍しい政治家の邸宅です。展示した写真は、ガイドの会員それぞれが「わたしの好きな宿毛」というテーマを基に集めたり撮影したりした写真と、宿毛の古老の方から提供していただいた古写真のアルバム、そしてそのスライドショーなどです。写真にはコメントも添えました。市長さんもイベントの会場に訪れてくださり、ガイドの会の活動や状況を知ってもらうことができました。地域の多くの方が足を運んでくださり、古い写真を「懐かしい」と喜んでくれました。また、写真の前で思い出話をされており、写真1つで人が繋がり、人の輪が広がるんだなあと実感しました。

同じ写真展をすさきまちかどギャラリーで、10月27日から11月4日の1日の休館日を除く8日間開催しました。開会初日は、会員の高知方面の友人や地元須崎の方々がたくさん足を運んでくださいました。高知市街地に近いところで発信することによって、県内に広く周知することができたと思います。

プロジェクト2は街歩きとイベントです。これは3つあり、1つ目のテーマは「松田川とわたし」、開催日は11月10日。会場は宿毛まちのえき林邸です。30人の参加でした。こちらのイベントは午後の3時間を前半と後半に分け、前半は松田川沿いの街歩きと会員一人の若き日と松田川に関わる思い出を、土手で語り聞かせました。後半は林邸で、宿毛にまつわる民話のストーリーテリングをプロジェクターを使って宿毛3大秘話の一つなどを資料を提示しながら語りました。話の合間には抹茶と和菓子を振る舞いました。お運びさんは地元のかわいい高校生にお願いしました。

2つ目は、「宿毛の祭りと五社めぐり」です。開催日は、11月24日。会場は、宿毛まちのえき林邸です。

午前中はミニ写真展とミニ演奏会を行い、入場者は60人です。写真展では宿毛の古写真をパネルにし展示、さらにバックヤードプロジェクトさんが手動、手製のインスタントカメラで宿毛の人物を撮影したポートレートも併せて展示しました。ミニ演奏会の出演者は、3団体。地元で日頃から音楽活動をしている方々にこだわりました。この画面は、Copin（コパン）というグループが宿毛出身の歌人、北見志保子作詞の「平城山」演奏しているところです。歌詞もこのように書いてお見せしたことで、歌人、北見志保子を肌で感じてもらうことができました。他にも、ギターの弾き語りやオカリナなどの演奏もあり、地元こんなに実力のあるミュージシャンがいたのだと、来場者が「私たちも感激しました」、帰りには、「また機会があったら出演したい」と言ってくださり、このイベントをきっかけにご縁が生まれたのが宝になりました。

このイベントの目玉商品は1日限定の手土産、『甘味の五社めぐり』を地元の老舗の和菓子屋さんに特注したものです。五社にちなんだお菓子を箱詰めにしてもらい、五社のご利益などを説明したチラシを作成し添えました。いろいろご無理を言ったにもかかわらず、お店の方に暖かいご協力をいただいたことが何よりの収穫です。

最後は、「ハイカラな街、片島」のイベントです。開催日は、12月8日。会場は、片島公民館。入場者数は、67人でした。このイベントは、計画、準備、実施に至るまで公民館長を始め、地域の方々を巻き込んでの取り組みでした。会場の入口には、地域の竹細工職人さんの出店や、お寿司の販売や地域のパン屋さんなどが並び、人と人との繋がりが色濃く残っている暖かい地域性を感じました。

オープニングセレモニーでは、高校生二人による獅子舞の披露。続く、地元のグループによる大正琴の演奏では、宿毛音頭や宿毛出身の浜口庫之助の作曲した「バラが咲いた」が演奏され、会場のみんなども思わず声をそろえて歌いました。また、50年ほど前に発売された、「片島の夜」という歌がありますが、この懐かしい歌の鑑賞会も行いました。そして、会場での写真による街歩きです。旧地域の住民も気付かなかったお宝を掘り起こし、外に出そうという私たちの活動に、訪れた人々たちからも「よう調べちょう」と共感してもらいました。そのほか、古老による片島の今昔についての語りなど、中身の濃い2時間でした。今回の事業で集客した人数は、延べ657人です。アートを触媒とした連続した今回の5回のイベントで、私たちの会の知名度は上がり、地元存在感をしっかりとアピールすることができました。また、会員それぞれが地域と一体となって、まちづくりに参画できたという実感が持てました。今後もイベントなどを通して、情報をアーカイブスにして、大勢の方々に宿毛のお宝を知っていただく活動を進めていきたいと思っています。



□意見

●今回の芸術活動では、歴史・文化・文化財に写真・絵画・音楽をコラボして街歩きに地域の歴史文化をガイドする市民団体が活動している点が今までにない切り口となっています。2か月間の長期にわたって活動する地点を変えて芸術活動を展開しているため、宿毛市民に与えた影響は大きなものがあります。高知県内にはそういう総合的な活動を展開している団体は少ないですが、地域の歴史文化を背景にして芸術を絡めたコラボは新たな視点といえます。東京で長年演劇活動をして宿毛に帰ってきている方もいますので、地域の人材の能力を発掘して、地域づくりや町づくりと連携した活動に成長することを期待しています。

⑦ 第6回 旭オンリーワン芸術祭

旭オンリーワン芸術祭は今年で6回目を迎えております。

今年度は10月20日に開催されました。テーマは「旭のお宝みつけた！ここ掘れワンワン！オンリーワ

ン！」というテーマでさせてもらいました。旭、地域に眠っているお宝をみんなで掘り起こそうという意味合いが込められています。第1回、第2回の会場は旭地区の多くの方が利用されている木村会館で行いました。3回目からは、高知男女共同参画センター「ソーレ」で開催し、旭駅周辺の旧商店街や接骨院などの場所をお借りして、作品を展示することでまちなかギャラリーへと変貌し、スタンプラリーも実施することで歩きながら楽しみながら旭の町を感じていただけたのではないかと思います。第4回、第5回は第3回を基本ベースとしながら、ギャラリーの数を増やしたり、さらに地元作家さんの作品を販売するミニマルシェの場を設けるなど変化工夫をしながら実施してきました。前年度の反省を活かし、より多くの方にまた広い世代の方に参加していただくため、各方面団体に広く広報を行いました。旭地区の民生委員児童委員協議会を始め、保育園、小中学校などへチラシを配布し、旭地区の方が多く利用されている場、目にする場へポスター掲示をさせてもらいました。また、今年度の新たな広報手段として新聞や情報誌にも開催広告を出していただき、ネット上ではフェイスブックやユーチューブを活用して動画の配信もするようにしました。その成果もあってか、ここ数年の中で一番多くの来場者を迎えることができました。

内容ですが、当日大きく分けてステージ部門と作品展示部門、体験コーナー、ミニマルシェとバザーコーナー、また食堂コーナーを設置しました。ステージ部門では合唱やピアノ、ギター演奏、詩吟やダンスなどをデイサービス利用者の方や趣味で活動されている方、サロンの仲間など13組の方々に披露していただきました。日頃の練習の成果やサロン仲間と一緒に目標に向かって成し遂げることで、仲間というものをより意識し合うきっかけにもなったのではないかと思います。作品展示では短歌や絵画、また写真や陶芸、手芸作品などの数々の芸術作品が展示され、251名の方々が作品を提供してくださいました。どれも思いのこもった作品ばかりで、来場された方も「ようできちゅうね」と感心しながらごらんになっていました。「私もまだ頑張らんといかん」との声も上がり、みんなが意識し合う場にもなったのではないかと思います。また、作品を通して話が盛り上がり、新たな交流が生まれる場面も多々見られました。また、親子そろって参加してもらえるきっかけ、思い出の一つにもなる場との狙いもあり、保育園、小学校などの子どもたちにも協力していただき作品を出してもらいました。また、その作品を地域の介護施設の一角をお借りして展示することにより、日頃そういった施設に出入りすることのない世代が介護施設に入っていけるというきっかけにもなったのではないかと思います。

体験コーナーでは、紙皿に自分の顔をクレヨンで描き、髪の毛をくっつけたりする紙皿アート、また専門学生による紙粘土パッチづくり、マイうちわづくり、好きな絵を描いてプラ板でキーホルダーづくりなど、その場で体験ができ、持ち帰ることもでき、子どもから大人まで楽しそうに体験されていました。また、コーナーの一角に視覚障害者が施すマッサージ体験を設け、スタンプラリーから帰ってきた方やステージを見終わった方々から大変好評を受けました。

ミニマルシェでは、手作りアクセサリーや雑貨、木工品などの販売とバザーコーナーを設置しました。ゆっくり品定めをする中、バザーで大量に買物をする方、休憩所も設置していたため、休憩する方など様々ではありましたが、こういったお店をもっと増やしてほしい、バザーが良かったなどの声も聞かれました。

食堂コーナーではうどん、3種類のごはん物があり、好評ではありましたが前年度の参加者数から想定して準備をしていたため、あっという間に売り切れになってしまったので、もう少し数を準備しなきゃいけなかったかなという反省の意見もありました。アイスクリームもありましたが、スタンプラリー制覇した方に無料券を渡していたので子どもたちが多く来ていて楽しんでもらえました。

今年6回目ですが、一番来場者が多くて、約660名の方に参加してもらいました。内容としましては、旭地区の住民サロン、企業者また施設の事業所関係の方、保育園、小学校の方々に来ていただいております。オンリーワンの成果です



が、広報活動に今まで以上に力を入れたことで、表に示してましたように地域内外を問わずたくさんの方々から来場していただけたということだと思います。閉じこもり傾向となりがちな高齢者の外出するきっかけにもなりましたし、作品を出展するために1年掛けて創作活動に取り組むなどの皆さんからの声も聞かれています。この芸術祭を通じて、多世代交流、地域の各種団体との人と人との繋がりも広がったと思っています。これからさらに旭オンリーワン芸術祭をより良くしていくためには、こういった福祉や介護の専門職が関わることによる特色をもっと出していくことや、地域の誰もが参加しやすく楽しめる内容としてマンネリ化しないよう創意工夫しながら地域に根づいた芸術祭となるような工夫が必要かなというふうに思っています。作品提供者にとっては、また来年も頑張って作品を出そうという生きがいづくりであったりと、介護予防というものにも繋がっており、そういった個々の思いが地域全体を元気にする原動力になっていただければいいなというふうに感じています。

□意 見

- 若者と高齢者を共通に巻き込んでの芸術文化的な活動ということでは大変意義のあることだと思います。ただ、もう一つ突っ込んで地域の生まれたものを発掘するであるとか、絶対残すべきものを残そうだとかいう、新しいものにも手をかけていただければ、より素晴らしいものになるのではないかと思います。

⑧ 香北にアートを生む～古民家でのアーティスト・イン・レジデンス+インスタレーション

AiRLite Kochiという団体は、ちょうど1年くらい前に有志の移住者の夫婦2組がアート活動の展開を目指して立ち上げた団体になります。まず、なぜアート活動を目指すことになったかという、私たちは移住して10年経つのですが、日常の中でアートの触れる機会がすごく少ないということを感じました。そこで、子どもたちが育っていく中で、できればもっとアートの触れる機会を増やしたいということで立ち上げさせていただきました。

なぜ、アーティスト・イン・レジデンスという形を採ったかということなんですけれども、私自身がアート活動を高知県に移住してくるまでにずっと行っておりまして、海外でアーティスト・イン・レジデンスを経験して、アーティスト・イン・レジデンスをすることによって、作家の方にとってもその地域から受ける影響や、その地域が作家から受ける影響がすごく大きくて、地域活性にも繋がるのではないかとということで、アーティスト・イン・レジデンスという形を採らせていただきました。

今回は、助成をいただきましたので、埼玉県から若手のアーティスト、大和由佳さんという方を招聘させていただき、1カ月間香北に滞在していただいて、作品を作っていただくという形を採らせていただきました。そのほかに、大和由佳さんによるワークショップを2つ、また、太田市美術館・図書館の小金沢さんという方に、日常でアートを楽しむためにどんなことを意識していけばいいのかということをお話ししていただくというレクチャートークを開催させていただきました。

当日の準備は、地域のお年寄りの方や子どもの方、あとは県内外の方に参加していただいて、約60名の方にワークショップに参加していただいて、一緒に大和由佳さんの作品を作り上げるというワークショップをしました。この作品が鳥型のFRPで作ったたらいみたいな容器なんですけど、それを田んぼに埋め込んで、そこに水を流して、その流し込んだ水に空を映して、いつも見ない空を意識するという作品になります。高い所から見ると、自分の作った作品が鑑賞できるという形の体験型の制作、体験をしていただきました。高知新聞にはワークショップの紹介をしていただいて、広報活動もしていただきました。

ワークショップ以外に、1カ月間滞在しながら、大和由佳さんに映像制作をしていただいていたのですが、その準備段階から蔵に上映されるまでに、かなりたくさん地域の方に参加していただいて作品を作りました。香美市というのはフラフというものがすごく盛んで、下見に来られたときにフラフを使った作品を作りたいということで、近所の方に、フラフの棒を立てるところから協力していただいて、作品づくりが始ま

りました。出来上がった作品は、AiRLite Kochiの会場内の蔵で1週間流して展示させていただきました。香美市の至る所で撮影されたので、また新しい視点で撮られた香美市の風景を見ることで、新しい価値観や視点が皆さんに生まれたと思います。



オープニングイベントの際に、群馬県の太田市美術館・図書館から来られた小金沢さんという学芸員の方に、日常でどういうふうにアートと触れていけば楽しめるかということ、自分にとってアートっていうのはどういうものか考えるきっかけを与えてくれるようなお話をさせていただきました。オープニングレセプションは大体100名ほどの方にお越しいただいて、その後、大和さんの作品の展示のフラフを上げるというレセプションの記念イベントに参加いただきました。

最後にワークショップを2つ行ったのですが、2つ目のワークショップは大和由佳さんがライフワークにされている「杖」というものについてもう一度、アーティストと一緒に考えてみようというワークショップで実際に杖を作ってみるということをしていただきました。

今回、地域活性という意味で始めたわけではなくて、本当に身近な方、自分たちの家族とか自分達のためだったりもするのですが、そういう人やものが山間部にいながらもアートを日常的に楽しみたいということで企画させていただいたことなので、なかなか地域の方にどれぐらい影響力があったかというところまでは難しいのですが、アーティストのフィルターを通して、自分たちの住む地域を見せていただいたということで、新しい価値観や自分たちの暮らしを見つめ直すきっかけが生まれたのではないかなと感じました。

□質疑応答

Q：知る人ぞ知る「カフェocho」というところで開催され、ocho自体がアートを発信してる場所だと思うのですが、香北は本当にそういう意味ではアートに関わる方がいらっちゃって素敵なおところだと思います。今回こういう素敵なイベントをして何か変わったことはありますか。

A：移住してすぐというのは、地域になじむために自分がアートをやりたいとかそういうことを押し殺してきて、カフェとかそういう理解してもらえる部分でしか発信してこなかったのですが、今回このアートをやることによって、「アートをする方なんだね」という住民の方達からの見方が変わってきたので、アートに対しても何か期待してくださっているという気持ちを感じました。

□意見

●ワークショップでの作品は2時間ちょっとで完成したと思うのですが、あれをタイムラプスとかで撮影して完成するところまでをアーカイブすれば、それ自体が作品化すると思います。この期間が終わってしまったら終わりということではなくて、カフェochoの周辺で作品が一部でも残っていると、何か作品自体がシンボルになるというように、香北のアーティスト・イン・レジデンスの知名度を残していく意味でも何も無くなってしまえばその後の交流も無くなってしまいますので、何かあっても良かったのかなと思いました。それが呼び水になって色々な方が来るということになるので、そんなふうに今後も発展していく要素がたくさんあるのかなと思いました。

⑨ 山下豊写真展「足摺黄金糖2017」

足摺黄金糖は土佐清水市大岐地区周辺で受け継がれている砂糖の製法で、その農家の中に元地域おこし協力隊の家族がいます。彼らはサトウキビを農薬や化学肥料を使用しないで栽培し、夏の炎天下の中、小まめに雑草を取りながら栽培をして、収穫前にはサトウキビの下葉を取るという作業を10日間ほどかけて収穫を

しています。製糖は午前3時からサトウキビを絞り、かまどの火を製糖組合の組合長が薪をくべて火を調節しながら砂糖の水分を飛ばしていった煮詰めてクリーム状にしていきます。その後、小箱に小分けにして自然乾燥して固めた後、ヘラ等で細かく砕いていきます。彼らの作る足摺黄金糖には、地域おこし協力隊の元同僚やIターン、Uターンで土佐清水に移住してきた人が彼らに共感してボランティアとして参加し、地元の農家、製糖組合の方たちに協力を得て砂糖を製糖しています。そんな彼らの足摺黄金糖に関わる姿を追い掛けた作品です。

展示会場は、ジョン万次郎資料館1階にある海風食堂です。室内の食堂の他にテラスで食事をできるスペース、ギャラリー兼雑貨を販売しているスペース、観光協会の展示スペースがあります。そこの中でまず観光協会のパンフレットを置いてある棚の下の部分を使って展示を行いました。収穫時はしゃがんで作業をすることが多いので、写真展を見ている人も一緒にしゃがんでもらって作業を追体験してもらうために下のほうに展示しました。また、当初、収穫時の展示は野外で展示する予定だったんですが、諸事情で室内の展示に切り替えました。展示は収穫、製糖の作業工程が分かるように順を追って構成しました。また、作業の風景だけではなくてその間にボランティアの方々が作業をしている写真を撮って展示しました。また、休みのときでも見に来てもらえるようにということで、照明を付けたままにさせていただきました。

助成金でできたこととしては、1m×3.6m、のプリントを制作することになりました。また、A1サイズのプリント、パネル加工を8枚、制作することができました。そして、A4のチラシを土佐清水市の広報と一緒に配布していただけたので、土佐清水市の七千余りの世帯に配布していただくことができました。

苦労したところ、残念だったところは、当初収穫時の写真を野外、海風食堂のテラスで展示する予定でしたが、会場のある施設が港にあり、雨風が町なかよりきつく、昨年たて続けに各地で甚大な被害を出した豪雨や台風のように、11月ですけど、来ないとはいえ、想定外の状況が予想されたため、閉店後、夜間に作品の管理ができない、不測の事態が起きた場合に責任が取れないということで、海風食堂のオーナーさん、ギャラリー担当と私とで話し合っ室内だけの展示に縮小しました。また、足摺黄金糖、砂糖を併せて写真展と一緒に紹介するという目的だったんですけど、写真展示前に砂糖が完売してしまったので、写真展と併せて紹介することが出来ませんでした。また、フォトブックとか作れば良かったかなというところがちょっと反省点ではあります。

良かったところとしては、土佐清水で砂糖を作っているということを知ってもらえました。土佐清水でそんな砂糖を作ってるってことを初めて知ったという方が、多かったです。また、足摺黄金糖の生産者、関係者の方々に喜んでもらえました。地元の人だけではなく、観光客、ジョン万次郎資料館に来ていただいた人にも知ってもらえました。また、期間中トークショーを開催しました。そのときに生産者の気持ち、作家の考えてることを伝えることができました。また、作品展示のときにもお話ししましたが、お店が休日でも写真展を見れるようにしてくれたので、助かりました。また、ツイッターやフェイスブックで情報を流してたのですが、見に来てくれた人がツイートなりフェイスブックで情報を流してくれて、それを見てくれた人がまた写真展を見に来てくれました。写真展終了後の2週間後行われた収穫、製糖作業には多くのボランティアが参加しました。2017年には4人、2018年にはその倍の8人で作業に当たりました。これが去年製糖した足摺黄金糖です。1月下旬発売となります。土佐清水くらし企画からお買い求めください。土佐清水の道の駅や、写真展をしました海風食堂、「FARMHOUSE CAFE」というところで発売しております。



また、今回の写真展は私が企画して色々な人の助けを借りてできた写真展でしたが、写真展をしたことでギャラリー担当者が神戸で土佐清水の田舎暮らしをテーマに、足摺黄金糖と写真展をセットでイベントを考えていたり、写真展期間中、生産者やボランティアに関わった人たちが、この足摺黄金糖のイベントを構想

したりしています。

私も去年また1年新しく彼らの姿を追っ掛けた写真を踏まえて、また次の展開へ実現していきたいと思っています。

□質疑応答

Q：やっぱり写真パネルと1つだけでも本物があれば良かったですね。

A：実際、観光客の方が結構来られて、本当に興味を持っていただいて「試食でもえいからないの」ということも何人かに話をされました。

※今年の黄金糖は、9月頃には売切れになった為、実物を展示できなかった。

⑩ フェスタ デ エスパニョール レストランテとステージ

11月4日に高知駅前でフラメンコのというよりもスペインの理解を深めていただきたいと思って開催しました。私が高知に来たときに「高知は文化が低いよ」とか色々言われました。でも、私は30のときに来ましたので30年以上住んでますから、そういうこと言われるのすごく嫌で、今まで発表会など色々なことやってきましたが、一度高知の駅前で開催したかったのです。どうしてかという駅前は高知へ到着しての最初の一步なのでそこで行いたかったんです。

ステージでセビジャーナスのコンクールをしようと思いましたが、残念ながら昨年までやってた教室のほとんどが潰れててやってないんです。もう少し早くやれば良かったなと思ってます。セビジャーナスというのは、スペインのセビリアにある民族舞踊なんです。そのセビジャーナスからフラメンコが発祥したということだったのですが、駄目でした。

サッカーも行う予定でしたが、3日くらい前になってある方から電話あって「サッカーできない」と言われました。クラシックバレエのほうも3日くらい前に電話があって、残念だけどできませんでした。社交ダンスは、私の友達の娘さんでユイ社交ダンスの方で、スペインにちなんだ踊りを2曲やってもらいました。フラメンコは曾我辺靖子さんがフラメンコ協会の常任理事なのでとってもレベルが高い。その一番弟子が清水さんで、私とそれから杉野仁美さん、この子は障害者なんです。あまり障害者障害者ってプリントに書くの嫌なんですね。差別してるような感じがして。それで彼女が「出たい」と言ってくれたので一緒に出ました。また、カンテはトップの方です。ギターの慶さんとても優秀な方です。

R K Cの放送局の方もとてもよく協力してくださりました。それから新聞にも「もう堅田さん出しちゃおき」と電話かかってきましたので、出していただきました。高知市のほうも、県のほうもお陰様で色々な関わりができたので嬉しく思っています。

出演者は、東京からお越しいただいた曾我辺靖子先生です。日本の代表的なフラメンコを踊る女性の方で、100人生徒さんがいます。それから清水裕美ちゃんが先生のところの一番弟子さんです。そして、仁美ちゃんという障害を持ってるお子さんです。

広報については、チラシを2000枚くらい作って友達や美容院、喫茶店にお願いしました。あとはNHKの「とさらじお」というラジオにも出ました。

今回は、出店をもう少し近所さんとかに声掛けて増やしてもいいなと思ってます。市内のスペイン料理屋さんにも出店してもらって、それから今度は参加型のフラメンコにしたいですね。

□意見

●専門家だけ呼んで開催するのであれば発表会みたいな形になりますので、やっぱり参加型にした方が良いでしょう。大勢の方に参加していただいて、そうするとやっぱり大勢の方にも見に来ていただけるということです。

●ぜひ単年度に終わらせるということなく、また来年度かその後に続けられるように、スタッフの充実も頑張ってください。

⑪ インスタント “KANTA” ポートレート展

今回は11月9日から18日までマレーシアからJeffreyさんという人に来てもらって一緒に「インスタント “KANTA” プロジェクト」という写真展を行いました。

この箱カメラについて簡単に説明すると、30cm×30cm×50cmくらいの箱にレンズがくっついてまして、そのレンズがくっついてるのでピントが合うんです。中でピントが合うシステムがあって、そこに印画紙をセットしてそのまま露光します。露光すると印画紙に像が光が当たった状態の印画紙を箱カメラの中がそのまま暗室になって、現像液と定着液が入っていて、その場でプリントができるというカメラです。なので、手づくりで全部手動でかなりアナログです。インスタントカメラでもある箱カメラを私が作っていて、マレーシアでもJeffreyさんが同じようなカメラを使って作品を作っているというのを、もともとはフェイスブックで知り合ったのですが、私がマレーシアに行ったときにその箱カメラ繋がりでお会って、Jeffreyさんと実際に会ってお話をして、作品づくりのテーマをアイデンティティーであるとか、境界であるとか、そういうことをテーマにお互いがしているという話になって、ずっと一緒にプロジェクトをしたいなというふうに思っていたのですが、今回、KOCHI ART PROJECTSの助成金事業の一環としてプロジェクトをできることになって、一緒に開催することができました。

今回はインスタントカメラでもあるという特徴を活かしたいなというふうに考えたので、日中撮影に出掛けて帰ってきた後に撮ってきた写真をばんばん追加で展示していくことをしました。なので、写真展をオープンしてる時間がちょっと遅くて、5時から8時までというふうになってます。最後の土日だけ11時から開けてました。日中に開けておくことも考えたんですけども、在廊して来てくださった方とやっぱりお話ししたいなというのを二人で話して、結果こういうことにしました。

日中の撮影についてどういうことをしていたかですが、撮影してその場で箱カメラの中で1枚のプリントが出来上がるということを行ったり、その場で出会った人に体感していただけたかなっていうのと、あとプリントとしての写真の存在感みたいなもの感じてもらえたらなというふうに思っていました。また、行く先々で一人一人に、時間が許す限り3つ質問したことがあって、お名前と出身地と、あとどういう言葉を話されていますかということ聞いてました。この3つの質問からその人の深いところに繋がっていくなというふうに感じました。お名前では、例えば「この姓はもともとこの地域にいっぱいあった姓ながよ」という話に繋がっていったり、あと女性の方だったら結婚して姓が変わっていたりするので、「もともとはこの場所におったがよ」とかそういう話になったりもしました。言葉でいうと土佐弁もすごい色々なグラデーションがあると思うんですけど、すごい強い土佐弁を話していたり、そうでもなかったり、あとご両親が県外出身の方やったらその言葉が混ざっていたりなど、お話を伺うことですごく深いというより大きなお話に繋がって、深い話を聞くことで、もっと大きなお話に繋がっていったらいいなということでインタビューをしていました。

撮影は、高知市以外で計7カ所くらいの地域に毎日行ってお話を伺ったり、撮影をさせていただいたりしました。その中で、今日会場にいらしてらっしゃる団体さんにもご協力いただいて、その方が知っている地域の方にお話を伺ったり撮影させていただいたりしました。そういう繋がりができたことも今回すごく良かったことだなと思っています。インタビューでも、その土地だからこそ、その場所にしかないその方のお

話や、その場所だからこそ育まれた産業であるとか、その生活みたいところが失われつつある地域もあって、そういうお話を実際そこでずっと暮らしている方にもしかしたら聞けなかったら残されなかったようなお話が聞けたということも良かったことかなというふうに思っています。

日中、外に出てお話を伺ったり撮影させていただくことが私たちににとってのインプットの部分で、アウトプットの部分でいうと、写真展の展示会場に来てくださった方とお話するであるとか、今日こんな話を聞け



たんですよとか、あとどういうことを私たちが日中してるのか、GPSでこういうふうにログ残していつてますとか、あとインタビューの音声録ってますとか、そういう器具、機材なんかを展示したりもしていました。

トークイベントは計2回行いましたが、最後のほうのトークイベントは結構人も来てくださって、私たちがどういう過程でこういう話を来てくださった方とシェアすることができたというのと、撮影させてもらった人たちも来てくれて、実

際この方たちが展示されてるところ見てもらったりとか、そこからまた話が広がったりとかして、来てくださった方の中でも有機的な繋がりができたことも良かったと思っています。

他のアウトプットの部分でいうと、まず宿毛観光市民ガイドの会さんにご協力いただいて撮影させていただいて、その宿毛観光市民ガイドの会さんの企画の中でも宿毛を撮影させてもらった写真を展示していただいたというのがあります。イベント的に行った部分もあって、土佐町や、オーテピア、薫工ミュージアムさんにもご協力いただいて外で撮影させていただきました。多くの方にこんなものがあるんですよというふうに見ていただいて、実際その人が写真展に来てもらって、こういう何かもっとそこからの入りでもっと深いこういう意図があったんですねってことが伝えられたというのもありました。あとSNSの発信もほぼ毎日しました。

反省点は、運営の部分でスケジュールが一杯過ぎて、毎日遠くへ行行って帰ってきて写真展して見てもらってお話ししてっていうことをしてて、2人とも何かたくたになってしまっていたので、もう少しスケジュール考えたら良かったなと思ったのがまず反省点で、外へ行くのを一日おきにすれば、もっと写真展開ける日も時間も増やせたなと思いました。事務の部分や、会場に行って説明してくださる方、記録してくれる方など、あとアンケートも綺麗に書いてもらったりとかできなかったのも、そういう部分でサポートしてくれる方をどなたかにお願いしたら良かったなと思っています。その反省も含め、今回アウトプットの部分でずっと継続できる形でデータベースにしようということで、ホームページを作ってます。今回のプロジェクトもJeffreyさんはマレーシア帰ってしまいましたが、私は高知で続けていけたらなと思っています。今回のイベントですごく人と人との繋がりがみたいなものを生み出せる、やっぱりイベントをしないと生み出していけないなと思ったので定期的に見ていただく機会というのも作りたいなと思ってますので、もしどこか撮影できる機会があったらぜひお声掛けいただけたらと思います。

□意見

●できるだけ写真を撮りためて行動すれば、見ていただいたお客様との話合いができて、よりこのことに対する理解を持っていただく方々を増やすということができると思います。また、どうしても前田さん1人で動いているみたいなので、そこら辺り何とか協力していただけるような方が作れないのかなということ。そして、写真については本当に古くて独創的なイメージで見た感じ本当にその人々のバックにあるものが写真にあるような感じがすることで非常に面白いです。しかも色々なお話を聞いて、その人の人生であるとかその地域のことであるとか、そういう部分も合わせて今、データベースを作られているということですが、これの残し方とそれをいかに還元していくかいうことで、そのあたりを頑張っていただきたいなと思います。

⑫ わっしょい！わっしょい、わっしょい、祭りだ、わっしょい！「キネマM豊穰祭」

昨年の11月10日から11日の2日間に掛けまして、私たちのほうでは、『わっしょい！わっしょい、祭りだ、わっしょい！「キネマM豊穰祭」』ということで映画の上映を軸にしたイベントを開催いたしました。

まず、わっしょいとは何だということなんですけれども、衣、食、住、映画、芸能、農、水、林、教育、金融など様々な分野において、祭りを開催して意識・課題の掘り起こしを行いながら、地域や企業そして人々を繋ぎながら、みんなでみこしを担ぐプロジェクトとして、わっしょいをスタートしております。わっしょい、その祭りというのは、映画の上映を軸にトークイベントですとかワークショップを合わせた複合的なものをお祭りとしております。

その第一弾として、最初に食育というテーマを取り上げました。この食育をテーマに3つのプログラムを今回ご用意いたしました。まずは、映画の上映、そして2つ目にみそづくりのワークショップ。3つ目としてゲストによる食育トークというものを展開いたしました。目的としましては、この映画の中でみそづくりを初め、実践されるいろいろな取り組みがあります。それを多くの方に知っていただいて、高知の食文化、そして子供たちの未来や未来の食文化を考え、発信する機会にするということを目指して行いました。

上映した映画は、ドキュメンタリー映画で『いただきます みそをつくるこどもたち』という映画になります。こちらはみそ汁、納豆、玄米ご飯、旬のお野菜など毎月100kgのみそを園児たちが自分たちで作るとい、日本の古き良き食卓を和食の給食で伝えていくという取り組みを長年されている福岡県福岡市の高取保育園の日々を追ったドキュメンタリーになっております。こちらの保育園は日本中から視察が絶えない状況でして、その驚きの高取保育術というものに子育て・食育のヒントが詰まっている、この映画に出会ったことがこのプロジェクトを始めるきっかけにもなっています。

まず、映画を見た方からの感想としては、「食べることは生きること」母としてできることをトライしていきたいなど女性を中心にそういった意見をいただきました。今回、親子で鑑賞いただくお客様も多かったのも、7歳の女の子からも、自分たちと同年それよりも下の子供たちが、みそを作っているシーンを見て、こんな子がいるんだなというところを気付いてもらえるきっかけにもなりました。この映画は2017年に全国で公開されている作品なので、前もって映画のみを上映することというのはもちろんできたんですけれども、映画のみだと偏った見方に繋がったりですとか、もっと本質的な部分で伝えたいことがたくさんあったので、今回、映画のみの上映ではなくて、トークイベントを合わせてもっと理解度が深まる、皆さんの生活に寄り添うようなイベントにしたいと、ずっと温存してきた作品でもありました。この映画見ていただくと、みそ作ってみたいという気持ちになる方が、非常に事前の試写会とかでも多かったのも、じゃあみそ作ってみようということで、当日、鑑賞いただいた後に定員制でみそづくりのワークショップを行いました。みそ作るに当たって、今回、四万十町の井上糍店さんというおみそづくりのワークショップなども定期的に展開されている井上雅恵さんにご協力いただきまして、大豆を潰すところからも実際に皆様に体験していただきました。ワークショップを始める前には、みそ汁と玄米おにぎりを召し上がっていただいて、これから作るもの、どんな味になるのかなという想像ふくらませながら取り組んでいただくために、まず食べて



いただくということも行いました。子どもたちも一生懸命、潰してシートが大豆だらけになったりもしていましたが、この大豆に高知の長宗我部元親に由来する古代大豆というものも混ぜて、安藤桃子が提案する豊穣みそということで、一緒に作りました。みそは発酵があります。これを作って半年後に食べられますので、まだ寝かせている期間となります。みそづくりワークショップに参加いただいた皆さんからは、日々の生活と照らし合わせて「食事の大切さを再認識しまし

た」などというお話をいただきました。子ども達は手を動かすことで、色々な経験を積んでいく、それを伝えることが大人の役目だと思いますので、そういうことができたのがとてもよかったなと思います。

3つ目として豪華ゲストによる食育トーク「いただきます！」ということで、ゲストにこの『いただきます みそをつくるこどもたち』のエンディングを歌ってらっしゃる坂本美雨さん、エッセイスト、フードコーディネーターでもあります安藤和津さんと映画監督オオタヴィンさんにお越しいただきまして、劇場前でオープントークを行いました。トークは完全に無料で劇場前はお客様でいっぱいになりました。子どもの頃のエピソードや、素直な言葉で語られる親になってからの感想など、ゲストの方々それぞれの視点で語っていただいた食育の大切さに多くの方が耳を傾けてくださりました。この日は土佐の豊穰祭そして、おびさんマルシェも近くで開催されていましたので、そこに来たお客様が耳を傾けて立ち止まってくださったりという姿もあって、この日は商店街全体にすごく賑わいがありました。

さらに夜の時間帯には、招待制で食育の関係者を集めた今回のプロジェクトの説明会を行いました。わっしょいというプロジェクトは、映画を観ていただいて、みんなで各分野についての課題の掘り起こしを行ったりやその分野について考えるきっかけづくりを行うことが目的です。そこからさらに掘り下げて、解決方法を考えていくところまで将来的に展開していきたいと思っています。

□質疑応答

Q：関係者の上映会に参加させていただいたのですが、その後も、そこに参加していた人たちが繋がって、何年後に何かをやる為に準備されているんですね。

A：まだ具体的なことが申し上げられないのですが、一つ大きな目標を掲げて、この日集まっていた方々に食育組合というものを結成いただいて、月に1回会合を開きながら今後どういうことをやっていこうかというアイデアを出すところから始めています。今回は、いただきますの上映とプラスみそづくりのワークショップというものを県内いろんな地域で開催できたらなということで、保育園の方々とも協力しながら、計画を進めているところです。夜の説明会のときにも、色々な企業の方、スーパーマーケットなども、お越しいただいたのですが、高知県は、みそ汁を全国と比べても飲まない県と言われているそうで、ちょうどみそ汁でご飯を推進していこうというプロジェクトを立ち上げようとしているタイミングだったそうなので、それともうまくコラボレーションしながら今後、具体的に3月、4月以降、具体的に活動を進めていく予定です。

⑬ 防災ママカフェ+「すさきでおどろう。かぞくでおどろう。」パフォーマンスワークショップ

実施の経緯なのですが、高知県須崎市は豊かな海の眺めを初め、自然の魅力にあふれた町です。しかし、その一方で歴史的に南海トラフ地震で地理的に津波に弱い地形というものもありまして、いつ起こるかもしれない災害の不安を常に抱えている土地でもあります。前の南海トラフ地震を経験されたお年寄りの方も少なくなってきたので、こういったような被害だったかというような伝承も困難になってきています。今回、小さい子どもさんを持つ保護者の方たちと共に、アート活動と連動したプログラムを通じ、効果的に防災を学び災害へ備える意識を踏襲し、生きる力を培いたいということで、この企画を行いました。

まず、子育て世代へ向けた防災への取組ということで、『防災ママカフェin Susaki』を実施しました。講師の先生は乳幼児ママのための防災ワークショップを全国で行っている「かもんまゆ」さんです。かもんさんは東日本大震災の被災地ママへの被災地支援を機に防災ママカフェというイベントを始められました。かもんさんの講演は受けると何か行動を起こしたくなるような、ママをやる気にさせるパワーに満ちたものになっています。2部構成で当日は行われて、第1部がママのための防災ワークショップです。30年以内にくる確率が約8割といわれている南海トラフ地震ですが、仕事、家事、子育てで毎日忙しいパパ、ママは考え

るだけで怖い、考えないようにしていると思えば思考停止状態に陥りがちです。かもんさんの講義では、まずできることからと促します。まずは敵を知り、武器をそろえること。正しい知識や具体的な例を交えつつ、緊急地震速報は戦いのゴングが鳴ったということ。15分揺れます。その揺れからとにかく身を守り、まずママが絶対に死なないことなど、お母さんたちをどんどん話に引き込んでいました。第2部では、防災食の試作、試食ということで、須崎市のほうでも一応備蓄はしているのですが、最低限のものしか備蓄してなくて、温かい炊き出しなどが食べることができるのは、2、3日ぐらいは無理かもしれないということもありまして、缶詰やレトルト食品で温めて食べることができるモーリアンヒートパックというもののなどの商品紹介をしてくださり、これをお母さん達で実際、作ってみようということを行いました。また、缶詰の、とてもおいしいパンの紹介もしてくださって、丸々入ってるのですが、それをどうやって切ったら、平等に皆さんに分けられますかというような質問が出されたりして、お母さんも取り組んでいました。避難生活では小さなことでもいさかいなったりするので、喧嘩にならないように、等分にすることが大事なんですという話をされていました。そうしている間に、その温めたご飯ができて、子ども達にも実際に食べていただきました。まずいものは子どもは食べない。子どもが食べれない備蓄は意味がないということで、とにかくお母さんたちが子どもさんが食べれるものを、普段食べているものを準備することが大事ですということを伝えてくださりました。防災ママカフェの今後の課題は、若い世帯に届く情報発信をし、自分から遠い存在である防災をいかに身近に感じてもらうか。お母さんたちを含め、女性ならではの目線で見た防災ということが挙げられると思います。

次に、『パフォーミングダンスワークショップ、ホナガヨウコ』についてご説明します。講師はダンスパフォーマー、振り付け家など幅広い分野で活躍しているホナガヨウコさんです。ホナガさんは演劇、コンテンポラリーダンスなどを経験し、独自のパフォーマンス作品を発表しています。当初、ホナガさんにはワークショップを1回程度行ってもらう予定でお話をしていたのですが、ホナガさんサイドからできるだけ長く滞在をして、高知や須崎などの地域の方々と交流を重ねたいということを希望していただきましたので、結果として多くの企画を実施することになりました。企画への参加者を初め、地元住民の方、キッズダンサーの子たちなど多くの方と交流ができたと思います。企画では、毎日、家事や子育てに追われるお母さんを対象にゆるゆるストレッチ講座を行いました。普段使わない筋肉を使ったストレッチや、凝り固まった体を伸ばすマッサージなどが行われ、皆さん気持ち良さそうに取り組んでいました。次が親子でからだ遊び！須崎市の富士ヶ浜で気持ち良くストレッチやからだ遊びをして、楽しく体を動かしました。道具も何も使わずに、アイデアだけでホナガさんがいろんな体の動かし方とか、遊び方を教えてくださって、非常にためになりました。次が『家族でディスコ！』です。須崎市内のキッズダンサー4名と共に、ホナガさんたちがステージ上で踊る動きに合わせて、親子で体を動かすイベントでした。ここまでの、須崎市内で親子向け家族向けに行った企画です。次に『カフェでダンスがオーダーできます！』という企画についてです。こちらの目的は、普段ダンスを目にする機会のない方に、気軽にダンスと触れ合ってもらう。ダンスを注文するという非日常的な体験を提供するというものでした。カフェを借りて、普通のお客さんもおいで中に行ったのですが、メニューにダンスのオーダー表があり、500円払ったら一つのダンスが見れますというものでした。正直、注文がくるか心配な部分があったのですが、意外に多くのオーダーが入って非常に嬉しかったです。

防災ママカフェすさきでおどろうダンスプロジェクトの良かった点としては、地域の喫緊の課題である防災に対する備えを、文化的側面からも考えることができました。また、企画実現に向けて手探りで進めましたが、講師の方々に誠意が伝わり、運営側の自信となりました。防災ママカフェ、ダンスともにプロフェッショナルなお2人を迎えることで、参加者からの反響がとても大きかったです。防災ママカフェについて



は、昨年度も実は実施してんですが、昨年度は市の共催ということもあって、有料にできなくて無料でした。それで、今年度は有料ということで、700円の参加費を徴収したんですが、昨年より参加者が増え、大きな効果を感じました。不測の事態に対し災害というテーマに沿って、地域の方々の団結力も高まったと思います。

苦労した点・反省点としましては、今回の防災とアートという2つの要素のパッケージングが非常に難しかったということです。楽しさをアピールしながら同時に重たいテーマを取り込み、興味を持ってもらうことの難しさを感じました。また、この2つの企画のプロジェクトリーダーが開催直前に入院する事態になり、運営体制も非常に変更を要して大変でした。日程的にもプログラムを詰め込み過ぎて、集客に苦労した面もありました。ホナガさん自身もかなりハードスケジュールになってしまっていたので、それが反省点かなと思います。

今後に向けては、被災時に小さい子どもさんを持つ母親の避難の切実さを、より多くの方に伝える取り組みを継続的に行っていきたいです。知識だけでも身体能力だけでも、自分の子どもを守ることはできません。そのことをより効果的に示す総合的な手法を考えたいと思っています。

□意見

●防災とダンスというのを結び付けるのは、難しいとおっしゃっていましたよね。やはり客観的に見て、これは別個のイベントだろうという感じが強いので、継続的に取り組んでいかれるということなので、次回以降は例えば、有機的に結び付くような形でやっていけばいいんじゃないかなと思いました。

⑭ アートツーリズム ～ゲージュツ遍路in大月町～

私たちは地区外のメンバーで運営しているので、そういったところからの視点で見たいと思います。まずは開催場所の大月町ですが、高知県の西の端にあって、アクセス性が良いとは言えない。JRも高速もないようなことに、まずギョッとしましたが、端に行くほど地域資源は多いかも？ということも直感的にですが感じていました。実際に現地に行くと、柏島という海があったり、魚が美味しかったり、資源が豊富だなと実感しました。一方で、資源は多いのですが、仕事が少ない、高校も大学も無い、そういった中で多様な出会いが少ないんじゃないかなとも感じていました。これでは価値観も硬直していくし、先細っていくんじゃないかという問題意識もあって、そうした前提を、どう企画に繋げようかと考えて、まずは芸や術を持ったアーティストの視点・方法を地方に持ち込んで、地域の活力のヒントやきっかけになるプロジェクトにしたいなと。

これまでは四国に関わりが深い、京都・松山・東京・香川・いの町にそれぞれ在住のクリエイター5名を中心に、大学生たちも交えて集落に入って活動していたのですが、なかなかそれだと広がり、深まりがないんじゃないか？という課題もあって、もう少しエリアやジャンルの幅を広げてやるのが、地域にとっても作家にとっても良いことなんじゃないかと捉え、関西メンバーを交えた10名でプロジェクト形成をしました。じゃあコンセプトをどうしようかという部分では、四国には八十八カ所のお遍路さんの文化があるぞと。僕らは地の民ではなく、風の民として外からの関わりなので、訪れるお遍路さんになぞらえた企画で進めていこうという形を取りました。

取り組みの概要としては、2018年6月から12月の約半年間の間に大月町に滞在して作品制作を行い、発表イベントを開催しました。その後、今回加わった5名の本拠地である大阪に行き、報告会を行ったというのが大まかな流れです。

具体的な活動についてですが、まず1人目の作家は、「赤泊・太刀踊り」という16名の集落に残る伝統芸能と出会い、演舞練習や小学校への出前授業サポート、現地の酒席に混



じる等をつうじて、色々と地元の方との交流を深めました。イベント当日は、地元の各地区の地区長さんが4名、5名ほどイベントに来てくれて普段できないような立場を超えた交流が生まれました。音楽・DJの作家は、地域リサーチを重ねながら色々と住民に語っていただき、最後にイベントで披露しました。造形作家は、竹やビニールハウスなど、使っていないものを活用して地元の人に協力してもらいながら立体作品の制作・披露を、美術家は「元美術教諭で地区長さんの奥様」とコラボし、自然素材を活用したモノづくり、もてなす、振る舞うという一連を作品として位置付けました。その他、映像作家は1年を通して「庭」を撮って季節ごとの魅力を作品化し、その他作家は音楽やパフォーマンスでの前衛的な表現をイベント時に行いました。8名の作家がいて、他にも色々なことが起きたのですが、時間の都合上省きます。最後に「イベント実施を踏まえた報告会」を、大阪・此花区のアートスペースで開催しました。色々と成果報告をする中で、「大月町めっちゃ海きれいやん、行ってみたい」という意見や、実際に来るような段取りの話もあつたりと、地域の外にPRできたと思っています。課題は、私たちは外から関わっていることもあって、なかなか現地状況を調整するということが遠隔で難しいってことを感じながら開催しました。開催場所の変更や天候などの連絡・調整含め、コーディネーション全般がなかなか難しいなと思ったのですが、諦めずに続けていけたらと思っています。最後に、この取り組みの最大の成果とも言えるかもしれませんが、今回参加した作家の中で劇的な縁があって、16名の集落に移住するという結果に繋がったので、今後は、先ほどのコーディネーターが難しいとか、色々なことのメリット、デメリットも含めて彼が担ってくれれば良いなと思っています。

□質疑応答

Q：夜の開催がメインということですが、例えば遠くから来た方は夜見て、夜通し帰っていただくような人が多かったのでしょうか。

A：当初予定していたのは1週間ほどの開催をして、集客のほうもゆっくり捉えて最終日を夜の部にして、泊ってくれるなら泊ってもらえるようにとは思っていたのですが、会場の変更等の問題も発生したりして、来てはもらったのですが、そのまま帰っていく形にはなってしまいました。

Q：移住ってすごい成果だと思うのですが、そのきっかけを聞いてもいいですか。

A：赤泊・太刀踊りっていう町の無形文化財にも指定されてる伝統芸能のある地区の、区長さんの男っぴりに中田粥という作家が惚れたというのがファーストステップ。彼自身も農的な暮らしをしたいというようなことがあって、そこが化学反応して、無料で農地を貸してくれるとか、すごく良い集落の対応があったので決めたという形です。

⑮ 地域の「ための」民謡づくりー「たらしめことば」の語りとアートの実践

（音楽を流して）このような歌を作りました。これが成果になります。私は京都から来まして、よそ者の視点で、皆さんと話せたらと思っています。

フィールドは高知県長岡郡の大豊町怒田集落です。最初は怒田（「ヌ」のほうにアクセントが置かれる）って呼んでいましたが、集落の方に「怒田（「タ」のほうにアクセントが置かれる）だよ」と発音がちょっと違うと訂正されました。そのようなことは、集落に行かないと分からないことだなと思いながら活動しています。活動が始まったのが2016年の7月で、定期的にこの集落に訪問して、どのようなことができるのかを一緒に考えてきました。集落の方にも京都に来てもらって、勉強会を開いています。

最初、集落の方より、怒田は、平均年齢74歳、人口70人ほどで、結構高齢になっているけど、「何か笑える面白いことやってね」というふうに言われて、「分かりました。じゃあ研究というよりか、楽しいことを

考えられたら、提案していききたいと思います」と話していました。一昨年、インタビューさせてもらった方が亡くなられ、私は大変ショックでした。どんどん高齢の方がいなくなっていくということで、楽しいことだけではなくて、集落が閉じていく、そういったことも含めて集落の記録をしてほしいと言われました。具体的に何ができるのか、楽しいことからだけでなく、集落の記録といった両方の側面での活動を模索するようになりました。

この写真は柵田の風景が綺麗だということがわかります。ただ、集落の方は、見ている風景が私とは異なっています。写真では柵田の風景が見えますが、畝の上にビニールハウスがあることがわかります。この場所は昔、鍛冶屋を生業にしていた方が住んでいて、「カジヤ」という屋号でした。その家を取り壊され、ビニールハウスになっています。現在は、この「カジヤ」の屋号と地理的特性の畝がつながって、「カンジャウネ」というふうに呼ばれていると教わりました。よそ者の視点による柵田の綺麗な風景という見え方とは異なり、集落では、ちゃんとその場所の歴史が言葉に刻まれています。地域資源というのは、外から来た人は分からないですけど、そこに暮らしている人には＜あたりまえ＞のように、言葉として残っています。ただ、カンジャウネという言葉は、高知市で暮らすようになった息子さんらは知らずに、この＜あたりまえ＞の言葉がちゃんと引き継がれていません。こういう言葉を残していきたいと思うようになりました。この企画では、地域を地域たらしめる言葉、これを短くして「たらしめことば」というふうにして、このような言葉を集めることをしていきたい。カンジャウネはまさに「たらしめことば」です。集落の人の言葉を集めていく。こういう活動をしていこうと決めました。



地域固有の言葉がどんどん無くなっていってしまう。そういうものを記録する。そこに住んでいる人が「こういう言葉があるんだね、こういう歴史があるんだね」と共感していく。歌づくりは、歌うことで笑って楽しめて、と同時に、集落の記録と口伝えで残る可能性があります。

私は研究職でアートから離れている存在で、初めての試みでもありました。ただ、アートの定義というものを自分の中で決めておかないと駄目かなと思います。アートの本質うんぬんというのは簡単に言えば自己表現、内から出てくるものがアートなんだと。個人の自己表現であったり、さらにはグループの表現であったり。今回のテーマである「地域×アート」はグループよりもう少し広く捉え、集団性の中の表現、そういったものを地域アートの位置付けとして考えています。つまり、ワークショップという集団性のなかで、みんなで歌が作られていくことが目標の一つでした。

審査後のコメントとして、指摘されたのが持続性と波及性でした。そこで、歌を作るだけではなくて、この活動が「地域×アート」のひとつの方法として皆さんが使えるようにすることで、地域内だけでなくさまざまなところで波及性や持続性につながるように努力したいと思います。

今回、ワークショップは8月と12月にかけて2回開催しました。8月は事前調査という目的で行い、12月は歌づくりという流れになっております。アーティストの方にも参加してもらい、高知大学の先生と学生さん、集落の方というメンバー構成で進めていきました。

8月のワークショップでは、集落にとって残さなければならないものって何なんだろうというものを探しました。グループごとにわかれて行われた調査では、学生さん、アーティスト、集落の方というメンバー構成にして一緒に歩いていくようにしました。

ワークショップではグループごとに2つのシートを使って記録をしています。1つは探検シートというもの、もう一つがインタビューシートです。それ以外に屋号があることが分かっていたので、屋号を聞き取りして、地図上に落とし込んで、住宅があるところと屋号を一致させていくというを行いました。

これらをもとにして、まずは事前に試作の歌を作りました。ひとつは「屋号うた」です。屋号を順番につなげて歌にしました。もう一つは、先ほど話したカンジャウネの話をもとにして、文字を7と5の文字に分

けて詞にして歌にしました。

12月のワークショップでは、まず準備した歌を歌いました。その後、歌と屋号の説明をすると、試作の歌では住居がある屋号しかなかったけど、集落の方の記憶がどんどん掘り起こされてきて、結果として、倍以上の80個くらいの屋号が集まりました。そうすると、試作の屋号うたは作り直したほうがいいとなり、メロディーが遅すぎるとか、こうしたほうがいいというアドバイスがあったので作り直そうと。ワークショップ2日目では、屋号の順番を変えて、メロディーを1から考え直して、歌にしていきました。

他には、集落のご夫婦にお話を学生と共に聞いて、昔の話を記録しました。これをみんなで共有して学生さんたちが詩を書いてくれて、曲を作ったという流れで歌にしました。先ほどのカンジャウネの歌の作り方と同じ方法で歌を作っていました。この方法は学生さんが1日で記録と歌づくりができたので、すごく効果的なのかなと思っています。また、歌づくりのワークショップを開催すると、詞を作ったという方もいました。この方は、「南国土佐を後にして」をイメージして作られたので、集落の皆さんと少しだけ詞を考え直して、素晴らしい替え歌ができました。圧倒的に集落の方が考えたこの歌がよかったです。これこそが集団性の中で作られたアートだと思います。他にも詞を書いてきてくれた人もいたのですが、ワークショップの期間が短かったので、今後も継続して作っていけたらいいなと思っています。

□質疑応答

Q：特に高知県の場合は、限界集落が多く又消滅しているという現実があって、そこで生きてきた人々の証、文化芸能がそのまま消え去ることは寂しい。この証・伝統の文化芸能をどのように後に残していくか企画に興味がありました。

問題は波及性と持続性がどうなるんだろうというところで皆さんは非常に疑問を持ったところでありますけれども、今の話で十分よく分かりました。2019年の夏に向けて盆踊りの振り付けまでされているんですね。

A：盆踊り用のメロディーや振り付けは、継続して作り直しています。やっぱり踊りたいというふうになって、踊りながら覚えていけたらいいなと思います。実は分からない屋号は歌には不必要ではないかという意見がありました。でも、残していったらいいんじゃないという話し合い結果となり、すべての屋号を使って盆踊りで踊れたらと思います。

★意見交換★ ※一部抜粋

●他の団体の方の事例の報告、すごく刺激的に聞かせていただきました。どんどん高齢化、少子化というのが進んでいく中で、文化芸術領域を底上げするという意味では、今日来られてる方も含めた、地域のコミュニティと文化芸術のコミュニティを繋ぐコーディネーターが非常に大切なんじゃないかなと思っていて、そこをどう、それぞれの地域ごとで頑張るだけではなく、全県下で頑張る仕組みが作れたらいいなということを感じています。何か高知でこういう場を定期的に持つのがいいのか、よく分かりませんが、その辺を模索していけたらいいなと思いました。

●高知で色々と活動されている方はたくさんいらっしゃると思いますが、やっぱり地元の人とうまく繋げるといったコーディネーターは少ないと思います。僕もUターンで帰ってきて思うのは、地元の若い人達がいなくなっていく。もっともっと自分達で繋がりを作っていったら良いのになというのがあるのですが、なかなか皆活動はしていても若い人が関わってくれないというのが多分あると思うんですよね。だから、そういうのも含めて、地元の人アイデンティティづくりを、それは本当に一朝一夕でできることじゃないと思うのですが、そういうのを積み重ねていくというのが大事なかなと思いました。

●バックヤードプロジェクトの前田さんは、この採択団体に入って、各団体との関係を繋いだんですよね。この仕組みの中で秋に開催するイベントの中でそれぞれの繋ぎ合いをする。それによって連携が起こるんですよね。できれば1年間、又は数年繋いでいく。色々な仕掛けを自分達だけでなく他と連携する。それが少子高齢化に対抗する手段だと思います。



第47回高知県芸術祭文芸賞

募集要項

No.

募集要項

募集部門

作品送付先

締切日

選賞

応募の注意事項

応募条件

作品への記載事項

部門ごとの注意事項

発表について

短編小説(1人1編)／詩(1人1編)／短歌(1人3首以内)／俳句(1人5句以内)／川柳(1人5句以内)

*()内は応募できる作品数

〒781-8123 高知市高須353-2
(公財)高知県文化財団内「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

平成30年9月28日[金] 当日必着

「高知県芸術祭文芸賞」(各部門1編)
「高知県芸術祭文芸奨励賞」(短編小説部門2編、他部門各5編)
表彰状と副賞が授与されます。
その他、佳作が選出される場合もあります。

類似(類想)作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害(経費)については応募者に負担していただきます。

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。
*私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。
*その他、上記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

① 部門名 ② 氏名(フリガナ) ※ペンネームご使用の場合は併記 ③ 住所 ④ 電話番号 ⑤ 年齢を必ず明記してください。
記載場所等は部門ごとに異なります。(下記表参照)
鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはっきり書いてください。

部門	記載方法・注意事項
短編小説	■作品本文は400字詰原稿用紙10枚以内。 ■パソコンの場合、20字×20行で設定してください。フォントは12以上。 ■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。 ・1枚目:タイトルを明記 ・2枚目～11枚目:作品本文 ・12枚目:部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。
詩	■作品は本編400字詰原稿用紙2枚、37行以内。 ・1枚目:1行目上方に部門、作品名、2行目下方に氏名を記入。 (3行目はあけて)4行目から作品本文を書き始めてください。 ・3枚目:住所・電話番号・年齢を明記。
短歌 俳句 川柳	■通常はがきを使用してください。 ※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。 その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。 ■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。 ・はがき表面に部門名を必ず記入してください。 ・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

*応募作品は返却しません。
*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。
ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。
*入選作品の著作権は、高知県及び(公財)高知県文化財団が所有します。

①入選者名は11月上旬、文芸賞受賞作品の全文は11月中旬～下旬頃、高知県芸術祭公式ホームページ上でそれぞれ発表予定です。
②入選作品は「高知県芸術祭文芸賞入選作品集」に掲載します。
③文芸賞および文芸奨励賞受賞者の方は、表彰式において表彰状と副賞が授与されます。
佳作受賞者には表彰状が授与されます(郵送予定)。
《表彰式:12月16日(日)高知県立文学館ホール(予定)》

詳しい情報については高知県芸術祭で検索

高知県芸術祭

Search

文芸賞

第47回高知県芸術祭

作品募集

募集期間

2018年9月28日(金)必着

募集場所

〒781-8123 高知市高須353-2
(公財)高知県文化財団内「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

TEL:088-866-8013

FAX:088-866-8014

E-MAIL:monmu@kagaku.ac.jp

募集部門

短編小説(1人1編)／詩(1人1編)／短歌(1人3首以内)／俳句(1人5句以内)／川柳(1人5句以内)

※()内は応募できる作品数

募集要項

※類似(類想)作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害(経費)については応募者に負担していただきます。

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。
*私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。
*その他、上記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

① 部門名 ② 氏名(フリガナ) ※ペンネームご使用の場合は併記 ③ 住所 ④ 電話番号 ⑤ 年齢を必ず明記してください。
記載場所等は部門ごとに異なります。(下記表参照)
鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはっきり書いてください。

部門	記載方法・注意事項
短編小説	■作品本文は400字詰原稿用紙10枚以内。 ■パソコンの場合、20字×20行で設定してください。フォントは12以上。 ■必ず、作品本文にページ番号をふってください。ホッチキス留めは不要。 ・1枚目:タイトルを明記 ・2枚目～11枚目:作品本文 ・12枚目:部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。
詩	■作品は本編400字詰原稿用紙2枚、37行以内。 ・1枚目:1行目上方に部門、作品名、2行目下方に氏名を記入。 (3行目はあけて)4行目から作品本文を書き始めてください。 ・3枚目:住所・電話番号・年齢を明記。
短歌 俳句 川柳	■通常はがきを使用してください。 ※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。 その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。 ■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。 ・はがき表面に部門名を必ず記入してください。 ・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

*応募作品は返却しません。
*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。
ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。
*入選作品の著作権は、高知県及び(公財)高知県文化財団が所有します。

①入選者名は11月上旬、文芸賞受賞作品の全文は11月中旬～下旬頃、高知県芸術祭公式ホームページ上でそれぞれ発表予定です。
②入選作品は「高知県芸術祭文芸賞入選作品集」に掲載します。
③文芸賞および文芸奨励賞受賞者の方は、表彰式において表彰状と副賞が授与されます。
佳作受賞者には表彰状が授与されます(郵送予定)。
《表彰式:12月16日(日)高知県立文学館ホール(予定)》

■応募状況と入選者数

	応募総数	応募人数	文芸賞	奨励賞	佳作
短編小説	50編	50人	1	2	0
詩	60編	60人	1	5	5
短歌	315首	119人	1	5	5
俳句	640句	140人	1	5	10
川柳	500句	108人	1	5	9
合計	1565作品	477人	5	22	29

※受賞者名と受賞作品名は52頁参照

■表彰式

開催日：平成30年12月16日（日）
会 場：高知県立文学館ホール
※表彰式への出席は、文芸賞・文芸奨励賞受賞者



《文芸賞入選作品集表紙》



■副賞

文 芸 賞	表彰状、高知の逸品セット（魚梁瀬杉シャープペン・ボールペンセット、手作りペアグラス（透千）、ペンケース（ほにや）、カタログギフト「結」、土佐旅福手ぬぐい、「天空の郷」3合セット）、図書カード
文芸奨励賞	表彰状、高知の逸品セット（魚梁瀬杉ボールペン、うめこ（土佐和紙コースター）、土佐旅福 一筆箋・手ぬぐい）、図書カード
佳 作	表彰状、図書カード

平成30年度 第47回高知県芸術祭文芸賞 入選作品一覧

部門名	受賞名	名前(ペンネーム)	作品 *小説、詩は作品名
短編小説	文 芸 賞	安藝友 知 史	時が消えた森
	文芸奨励賞	柴 田 由 野 村 生 一	間（アワ）いの豊饒 泣きなくなったら、ここにおいで。
詩	文 芸 賞	下 元 真 人	おれおれ
	文芸奨励賞	甫 木 恵 美	一日の終わり
		和 田 由 香	あなたは柳
		岡 本 敏 之	やったね 末ちゃん
		田 中 福 三	真昼の怪談
		倉 橋 孝 彰	監獄惑星
	佳 作	吉 門 あや子	とめどなく
		いずみ し づ	詩人「尹東柱（ユンドンジュ）」
		恩 田 凍 羽	そんざい
		片 岡 和 子	水と共に
		國 友 積	亡母（ハハ）
短歌	文 芸 賞	蛭 子 泰 明	二階屋の網戸六枚張り替へて鮎の遡上のごとき子ら待つ
	文芸奨励賞	尾 崎 淳	耳もとに蚊の音のして薄曇の夜夢に葉を挟みて覚める
		左 山 遼	雪を被く忠霊塔の墓碑銘にずらりと並ぶ一村の死者
		井 上 志 津	音読す夫（ツマ）は胡座に子を抱きて八十ページ水を飲みつつ
		竹 村 有 未	歩いたら桜の風が吹いて来る小学校の最後の春だ
		松 田 悠 大	向日葵に虹色の光照射とほる焦がれる恋の眼差しのごとく
	佳 作	中 島 涼	新之丞を殺めたる太刀洗ひしとふ谷よちのぼる地籍調査に
		沢 村 洋 子	バス降りる我の足もと確かめて若き運転手笑みて手上げる
		矢 野 重 雄	峰ちかき山家に配る郵便の職に生きたるわが足撫づる
		山 崎 光 子	南溟に兜太いくらし精霊舟ひたすら波濤乗り越えてゆく
		谷 柚 帆	おばあちゃん朝一番に仕事行くやっぱり一番働きものだよ
俳句	文 芸 賞	筒 井 南 実	青空へ投げる数式夏の果
	文芸奨励賞	足 立 秋 子	満身のやはらかなりし鯉職
		中 村 梅 子	片減りの鰯も受け継ぎ秋耕す
		山 崎 紀美子	水桶の箍は青竹新豆腐
		和 田 和 子	蠅叩吊つて赤牛飼ふ暮し
		乾 真紀子	立秋や垂らして何も持たない手
	佳 作	矢 野 重 雄	振花をほどけば吉と出る予感
		岡 林 知世子	足弱の母の流灯躰きぬ
		明 石 韭 生	脇付にまるるの三文字十三夜
		竹 中 良 子	境内の暗きに点す立版古
		島 崎 有 造	囃や岬の寺の涅槃仏
		田 村 乙 女	また人を寂しがらせて水澄めり
		村 岡 希 音	たんぽぽといっしょに飛び立つ卒業生
川柳	文 芸 賞	熊 谷 敏 郎	竹めば迷子に戻る夜店かな
	文芸奨励賞	大 窪 雅 子	鳥渡る木の橋多き山の町
		山 下 正 雄	青時雨古仏の如き母を拭く
		山 本 由 美	秋の星金平糖が歌いだす
		近 藤 糾	てのひらに君と歩いた地図がある
		足 立 秋 子	はいチーズだなんて嫌い鮫鯨鍋
	佳 作	瀧 本 あおい	サンダルの形どおりに日焼けする
		藤 田 歩	ひばあちゃんが一番多いお年玉
		徳 永 逸 夫	何気なく結んだ糸がほどけない
		沢 村 洋 子	ここまでが家の畑と彼岸花
		大 野 美智子	あの時はあれで良かったはずでした
		笹 岡 日 向	夏の道グラグラゆれるアスファルト
		山 本 世志恵	断捨離のふるさと最後に取っておく
		藤 田 ゆずあ	こいのぼり子どもが親をかたぐるま
		山 下 正 雄	三色の二色は付かずボールペン
		熊 谷 敏 郎	平成は斜体で棚に立てておく
		岡 林 裕 子	桃缶とスタックートで生きてゆこ
		長 瀧 叶 太	トントントン風のお客がノックする

※名前は入選作品集の記載名

メインイベント「チェコ・フィルのヴィルトゥオーゾ競演！」

高知県芸術祭執行委員会事務局

2018年の5月某日、私はとある演奏会を観覧する為、神奈川県鎌倉市にある鎌倉生涯学習センター『きらら鎌倉』を訪問しました。演奏会の出演者は、世界の名門『チェコ・フィルハーモニー管弦楽団』のメンバー4名と日本人ピアニストです。演奏会の感想は、「素晴らしい！」の一言でした。過去に何度か弦楽の演奏を聴いたことはありましたが、同じ楽器でも演奏者によって音色が違うというのは、まさにこのことだと思いました。とても繊細な音色は、美しく、まるで自分がヨーロッパを旅しているような感覚にしてくれました。

さて、なぜ私がこの演奏会を訪問することになったかと言いますと、平成30年度の高知県芸術祭メインイベントとして、演奏会にご出演されていた、ヴァイオリニストのイルジー・ヴォディチュカ氏とチェリストのフランティšek・ホスト氏をお招きすることが決まっていたからです。イルジー氏は若きコンサートマスターとして、フランティšek氏は首席チェリストとしてご活躍されているとのことでしたが、クラシックにあまり詳しくない私は正直、実際に彼らの演奏をお聴きするまでは、2人の演奏家とピアニストの演奏会でお客様に満足していただくことは可能だろうか。集客できるのだろうかという不安がありました。しかし、実際に演奏を聴かせていただき、高知の皆様にも是非この音色をお届けしたい、必ずや県民の皆様にもご満足していただけるだろうと確信を持つことができました。また、逆に、彼らの本拠地であるチェコ・フィルハーモニー管弦楽団で演奏する姿の動画も拝見し、この様な素晴らしい演奏家の方々に高知に来てもらうなんて良いのだろうかという心配すらでてきたほどでした。

帰高してからは、12月の演奏会へ向けさっそく準備にとりかかりました。招聘元であるアルペジオ音楽企画さまとご相談をさせていただきながら、競演者や内容を決めていきました。チェコの演奏家お2人と競演するピアニストは、高知県香南市出身で現在は東京でピアニストのみならず、さまざまな分野でご活躍されている濱口典子さんをお願いすることとなりました。また、鎌倉での演奏会の際、プログラムに日本の曲メドレーがあり、涙がでるほど感動したので、ぜひこれを高知でも入れてほしいと思い、基本プログラムの他に日本の曲とアンコール曲として郷土の曲を入れていただくこととなりました。アンコール曲は県民

が慣れ親しんだ曲、誰もが口ずさめる曲ということで、『南国土佐を後にして』に決定しました。9月に入ると、観覧客の募集をする為、各地へご案内チラシを配布したり、新聞広告を掲載したりしました。その後も準備は着々と進み、ついに本番がやってきました。

イルジー氏とフランティšek氏は、公演前日の12月10日に高知県入りされました。実際にお会いしてご挨拶するのは初めてだったので、とても緊張していたのですが、空港の到着ゲートから出てこられたお2人は、こちらに気づくと笑顔で日本語で挨拶をしてくださいました。2人の素敵なお人柄が垣間見えて、あっという間にファンになってしまいました。その日の夜は、ピアニストの濱口さんも合流し、会場となる県立美術館ホールにて前日リハーサルが行われました。ほぼ初めて3人で合わすはずなのに、息のあった演奏に驚くばかりでした。

11日の公演では、本公演の前に、ピアニストによるトークショーを開催しました。これは、ピアニストの濱口さんと司会者として登壇していただいた当芸術祭の執行委員長である新納さんからの提案によるものでした。せっかくお越し



いただくお客様に、2人の演奏家の故郷であるチェコ共和国について少しでも知ってもらいたいという熱意のもと企画されました。トークショーでは、チェコ共和国の歴史や音楽についての話を中心に約30分間楽しいトークが繰り広げられました。トークショーも終了し、演奏会からご観覧されるお客様も入場され、399席ある客席は、ほぼ満席の状態となりました。演奏会は、ヴァイオリンとピアノによるチェコを代表する作曲家『スメタナ』の『わが故郷より〜2つの二重奏曲』から始まり、チェロとピアノによる『エルガー』の『白鳥』や『初恋』『浜辺の歌』といった日本の名曲も演奏されました。そして後半は、チェコの演奏家お2人と観覧客のトークタイムから始まりました。観客からお2人



への質問タイムなども設け、終始お2人の仲の良さも伺え、和やかなムードで進みました。驚いたのは、イルジー氏は高知への来高は初めてとの事でしたが、

フランティšek氏は4回来られたことがあるということでした。今回の来高は短い期間ではありますが、今回の来高が一番良い印象として残っていただけたら良いと思ったことでした。その後は、ピアノの濱口さんも合流し、チェコを代表する作曲家『ドヴォルザーク』の『ピアノ三重奏曲第4番ホ短調「ドゥムキー」作品90』全6楽章、約30分にも及ぶヴァイオリン、チェロ、ピアノによる演奏です。3人の息をもつかせぬ名演は観覧客を釘付けにしていました。3人の演奏家がアイコンタクトをとり、時に笑顔を交わしながら、演奏する姿からは国境を超えた互いへのリスペクト



を感じる事ができました。そして、約2時間の演奏会の最後をかざったのが、アンコール曲『南国土佐を後にして』です。演奏前にピアニストの濱口さんから「私はスペインにはよく行きますし、海外旅行にも行きます。でも故郷は大事にしたいと思っている。この日の為に編曲家の方が編曲してくださいました。世界初演です！」というご挨拶をいただきました。歌詞の意味を理解して演奏してほしいと、濱口さんは日本語がわからないお2人にリハーサルの際、この曲の歌詞を伝えて歌を唄いながら意味を伝えてくださいました。そうして、披露された『南国土佐を後にして』は、より深い楽曲となっており、情景が浮かぶようでした。ある観覧客の方が書いてくださっていたアンケートには、「最上のよさこい節を聴くことができました。ベギー葉山さん、武政英作先生も喜んでいらっしゃるでしょう。」とありました。演奏会で披露された楽曲は、どの曲も素晴らしかったのですが、来場された県民の皆様の様子を見ると、やはり地元高知の楽曲は格別なんだなということを感じました。

演奏会は大成功だったと思います。アンケートでも、「素晴らしい演奏会だった。」という声を多くいただきました。また、会場で販売した、イ



ルジー氏とフランティšek氏のCDも既完売で、演奏会の満足度の高さが伺えました。会場には、自身もヴァイオリンやチェロ、ピアノを習っている学生の方々もいらっしやり、この演奏会に参加した事が、将来へ繋がる一歩となれば良いと思うと共に、世界で活躍する演奏家とこうして身近に触れ合える機会は大切だなと感じたことでした。実際に、彼らの生の演奏を初めてお聴きしてから約半年、準備を進めていく間、色々な不安もありましたが、無事、大成功のうちに演奏会を終えられてほっといたしました。

今回の演奏会で、世界で活躍されている方々の生の



音楽をお届けすることの大切さを改めて感じると共に、濱口典子さんという素晴らしいピアニストが高知県出身であるということを誇りに思いました。そしてこれからも、高知県芸術祭として、県民の皆様にも身近に素敵な文化芸術の数々をお届けできるよう、尽力して参りたいと思います。

余談ですが、演奏会の夜、演奏家とスタッフの皆で簡単な打ち上げを行いました。打ち上げ会場のお店は、高知県産の食材を使用した料理を提供しているお店でした。来日された際、いつも彼らと行動されているスタッフによると、生のお魚を食されることはほとんどないとの事でしたが、お2人ともお魚をはじめ、あらゆる料理を美味しい美味しいと、たくさん食べてくださいました。高知県の自慢である美味しい料理でのおもてなしに満足していただけて、いち高知県人として誇らしく思ったことでした。

イルジーさん、フランティšekさん、そして、濱口典子さんとまた高知でお会いできることを信じて。

演奏会に携わったすべての方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

■公演日時：平成30年12月11日（火）

会場：高知県立美術館ホール



（文責：政岡知実）

◎共催行事

※ 記載内容は原則として事業実施報告書の記載に則しています。
※ 開催日（部門別）の順に掲載しています。 ※ 参加者数は、芸術祭会期中内での集計となります。

部門名	行 事 名	主 催 団 体	日 程
演劇	高知県立美術館25周年記念 パイロットセミナー 【地域のアトリエ#01】 老いと演劇「OiBokkeShi」（オイボッケシ）	高知県立美術館	平成30年10月23日（火）～10月25日（木）
舞踊・ダンス	高知バフォーミング・アーツ・フェスティバル2018 アーティストインレジデンス2018 「ランダー&サイトル」（スウェーデン）	高知県立美術館	平成30年11月3日（土・祝）～ 11月4日（日）
美術	石元泰博・コレクション展 「HANA」	高知県立美術館	平成30年8月7日（火）～11月25日（日）
	シャガール・コレクション展 「動物」	高知県立美術館	平成30年9月4日（火）～11月11日（日）
	第22回高知県障害者美術展 （スピリットアート）	高知県、 高知県障害者美術展実行委員会	平成30年10月5日（金）～10月14日（日）
	コレクション・テーマ展（2） 土陽美術会	高知県立美術館	平成30年10月18日（木）～12月20日（木）
	企画展 「芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師」	高知県立美術館、 K U T V テレビ高知	平成30年10月28日（日）～ 平成31年1月6日（日）
	シャガール・コレクション展 「恋人たち」	高知県立美術館	平成30年11月13日（火）～ 平成31年1月20日（日）
	石元泰博・コレクション展「シカゴ建築」	高知県立美術館	平成30年11月27日（火）～ 平成31年3月31日（日）
映画	高知県立美術館秋の定期上映会 「カイエ・デュ・シネマが選ぶフランス映画の現在」	高知県立美術館	平成30年10月27日（土）・10月28日（日）
文芸	寅彦先生に学ぶ天災展 天災は忘れられたる頃来る	高知県立文学館	平成30年9月15日（土）～11月4日（日）
	第21回児童生徒文学作品 朗読コンクール県審査及び記念講演会	高知県立文学館	平成30年11月11日（日）
	江戸川乱歩の華麗なる本棚 文豪ストレイドッグス×高知県立文学館	高知県立文学館	平成30年11月17日（土）～ 平成31年1月14日（月・祝）
伝統文化	創作能「龍馬」	高知県立坂本龍馬記念館	平成30年11月10日（土）

会 場	参加者数（人）	行事内容と成果等
高知県立美術館ホール、 講義室	284	本年度から試験版として始めた企画でしたが、平日開催にもかかわらず「老いと演劇」という題材から、介護に携わる方から演劇愛好家まで幅広い客層に舞台芸術の可能性を広げられる契機となりました。
高知県立美術館内	100	当館収蔵作家の石元泰博氏に晩年に着目した“うつろい”を題材に、体験型作品「シンフォニー」高知版を地元ダンサーをガイド役、高知出身のアーティスト藤原ちから氏を邦訳監修に迎えて製作発表をし、好評を博しました。
高知県立美術館 2階・石元泰博展示室	6,918	1988年に発行された写真集『HANA』掲載の作品を中心に、石元泰博の視点で捉えた芍薬、水仙、椿など「HANA」の作品を前期・後期で60点紹介した。広報用に頒布用DMを作成したが、手に取るお客さまが多く『HANA』の認知度を上げることができた。
高知県立美術館 2階・第1展示室	4,832	初期連作版画の傑作『ラ・フォンテーヌの寓話』のための挿絵12点とウシ、ロバ、トリなどが描かれたリトグラフ作品を展示。シャガールの特有のデフォルメされた動物などを紹介することができた。
高知県立美術館	5,103	1,187点の応募作品のなかから、256点を展示しました。独創的で感性溢れる作品の数々は、訪れた多くの人に感動を与え、障害のある方への理解につながっていることが感じられます。
高知県立美術館 1階・第4展示室	3,396	明治期から昭和初期にかけて活動した高知ゆかりの美術団体「土陽美術会」の活動を、日本画を中心とした所蔵作品やパネル説明を通して紹介した。H29年度の新規収蔵作品の展示も併せて行い、好評を得た。
高知県立美術館 第2・第3展示室	7,063	幕末維新期に江戸、東京で随一の人気を誇った浮世絵師、月岡芳年の画業を網羅的に紹介する展覧会。世界屈指の芳年コレクターである西井正氣氏のコレクションから美しい浮世絵作品を選りすぐり、展示した。
高知県立美術館 2階・第1展示室	3,611	妻ベラの姿を描いた作品や空をとぶ恋人たちなどシャガールにとってもっとも重要なモチーフといえる、恋人たちの姿を描いたりトグラフを展示した。
高知県立美術館 2階・石元泰博展示室	816	高知育ちの世界的写真家・石元泰博が、学生時代を過ごすなどゆかりの深かったアメリカ・シカゴの建築物をとらえた写真シリーズを展示した。1960年代撮影当時の貴重なプリントを含む計72点を紹介することができた。
高知県立美術館ホール	257	今回2000年以降の新しいフランス映画の上映が出来、作品も大人の恋愛映画から、歴史ドラマ風ミュージカルからコメディまでと幅広い作品を県民に紹介できたのは良かった。
高知県立文学館・ 企画展示室	2,154	本展覧会は、①寅彦に親しんでもらう②寅彦のエッセイや研究を知っていただく③これからの天災に備える の3点を目的とし、一定の成果を得た手ごたえがある。今後も寅彦をはじめ顕彰作家を新しい切り口で紹介し、館職員一丸となって県内外の人々にその魅力を伝えて行きたい。
高知県立文学館 1階・ホール	201	11月11日開催の県審査には、夏の地区審査を経て選出された23名の小中学生が出場し、日頃の練習の成果を表現豊かに発表、会場は静かな熱気で包まれました。また、特別審査委員である横山充男先生（高知県出身・児童文学者）による記念講演会も開催し、「ことばは生きている」と題して貴重なご講演をいただきました。
高知県立文学館・ 企画展示室	6,947	人気作品「文豪ストレイドッグス」とコラボし、当館の顕彰作家である黒岩涙香・森下雨村と江戸川乱歩の関わり、高知の文学の奥深さを味わっていただくことが出来た。これからも、多彩なアプローチで分かりやすく文学の楽しさをお伝えしたい。
高知県立美術館・能楽堂	227	県立坂本龍馬記念館リニューアルオープン記念事業。龍馬に世界情勢のことなどを教えた河田小龍の曾孫・宇高通成師による創作能。「龍馬脱藩」をテーマにし、台詞も現代語に近いことから、能楽を初めて見る方にも好評であった。

総合文化	企画展 幕末維新 時代の群像展 ～土佐の社会と人物～	高知県立高知城歴史博物館	平成30年9月14日(金)～11月26日(月)
	特集展 近代日本の出発 ～高知藩の時代～	高知県立高知城歴史博物館	平成30年9月22日(土)～11月18日(日)
	特別展「龍馬 ～真物から感じる龍馬の魂～」	高知県立坂本龍馬記念館	【前期】 平成30年10月25日(木)～11月25日(日) 【後期】 平成30年12月1日(土)～12月24日(月・振休)
	企画展「維新が変えた庶民のくらしー絵馬や民具から読み解く高知の近代ー」	高知県立歴史民俗資料館	平成30年10月6日(土)～12月9日(日)
	特別展 土佐 焼物のなりわい	高知県立埋蔵文化財センター	平成30年10月14日(日)～ 平成31年3月29日(金)
	なかひらじゅんこ 「ぶらぶらカプセルおばけを作ろう！」	(公財)高知県文化財団	平成30年10月27日(土)
	古代ものづくり体験教室 (ガラス玉づくり、琥珀勾玉づくり)	高知県立埋蔵文化財センター	平成30年10月28日(日) ガラス玉づくり 12月2日(日) 琥珀勾玉づくり
	第7回旧大栃高校民俗資料一般公開	高知県立歴史民俗資料館	平成30年11月10日(土)～11月11日(日)
	特集展 歴史になった幕末維新 ～記憶から記録へ～	高知県立高知城歴史博物館	平成30年11月23日(金・祝)～ 平成31年2月3日(日)
	企画展 福を呼ぶ 城博のお正月	高知県立高知城歴史博物館	平成30年12月7日(金)～ 平成31年2月3日(日)
	ママ・カルテット 「クリスマスミニコンサート」	(公財)高知県文化財団	平成30年12月16日(日)

高知県立高知城歴史博物館	23,480	特に政治面と文化面において江戸時代後期から明治時代初めに活躍した土佐の人物に焦点を当て、ゆかりの資料を紹介した。 土佐の幕末維新といえば必ずと言っていいほど名前があがる約20名の人物ゆかりの資料や作品を県内外の多くの方にご覧頂ける機会となった。
高知県立高知城歴史博物館	17,863	土佐藩の終焉と高知藩の成立を関連資料から紹介し、全国的にも注目された高知藩の政治改革や知藩事山内豊能範の活動を紹介した。 わずか2年の期間でありながら数々の先進的な取組を行った高知藩の政策形成過程等を知っていただく機会となった。
高知県立坂本龍馬記念館	33,473	他館や個人のご協力により、当館所蔵分と合わせて10点の龍馬直筆資料を展示した。また、11月15日～18日の4日間に合わせて、龍馬の湿板写真の原板を展示し、大変好評を博した。また、個人からお借りした岡田以蔵の拳銃は、熱狂的なファンが多数訪れた。
高知県立歴史民俗資料館	4,209	仕事や祭りの様子を描いた明治時代の絵馬、形や素材が変化し、洋式化する民具、関連する当時の史料などから、明治維新以後の高知の庶民生活の変化を紹介した。 関連企画として、西畑人形の公演、土佐打刃物や近代化遺産を訪ねるツアー、近代における民具に関する講演会などを行い、いずれも好評を得た。
高知県立埋蔵文化財センター・オーテピア高知図書館 (11/8のみ)	835	藩政～明治初頭の土佐の窯業について紹介する展示を行い、期間中に佐賀県有田町から講師を招き特別講演会を開催。参加者の感想から、あまり知識がなかった、日本の磁器生産の歴史を知る良い機会になったことがわかる。
イオンモール高知・専門店街1Fセントラルコート	77	がちゃがちゃのカプセルに、ボンドでボタンや目玉のパーツを付けおばけの顔を作ります。さらにマスキングテープや折り紙、リボンや毛糸などで装飾を施して、カプセルの上部に紐を通したら、ぶらぶらゆれるカプセルおばけの完成です。カプセルの中にキャンディーやチョコなどちょっとしたおやつを入れることができ、怖いおばけやかわいいおばけなど、ハロウィンパーティーにもぴったりのカプセルおばけになりました。
高知県立埋蔵文化財センター	ガラス玉づくり：14 琥珀勾玉づくり：19	琥珀勾玉づくりは、再生琥珀の形を整えながら磨き上げる人気企画。参加者の感想から、徐々に輝きを増していく琥珀勾玉を通じ、古代の人々が勾玉に寄せていた思いを実感できたことがわかる。
旧高知県立大栃高等学校	254	旧大栃高校に保管されている民俗資料の公開にあわせて、民具の実演やお年寄りへの聞き取り調査の他、今年は、高知県立大学と県立山田高校の学生による民具調査の成果報告、小中学生の描いた民具の絵等の掲示、徳島県那賀町の地域おこし協力隊員による米作りについての充実した展示などを行うことで、伝統文化への理解を深める機会となった。
高知県立高知城歴史博物館	18,265	土佐の幕末維新时期を事例に歴史の伝えられ方を考える展示としておこなった。明治150年最後の特集展として、歴史のつむがれ方、歴史資料の信憑性、史観の問題について考えていただく機会となった。
高知県立高知城歴史博物館	13,876	おめでたい図柄の美術品、あわせて館蔵・寄託の国宝・重要文化財を展示、鑑賞方法を丁寧に解説した。 日本美術の多様性、技術の高さをご覧いただくとともに、鑑賞の楽しさを知っていただく機会となった。
イオンモール高知・専門店街1Fセントラルコート	約95	来場された方々に鈴を配り、音楽に合わせて一緒に鈴を鳴らしてもらったり、バイオリンなどの楽器演奏を子どもたちに体験してもらうなど、演奏するだけでなく、体験型のコンサートになり、子どもたちだけでなく、大人のかたにも楽しんでいただけたと思います。

◎協賛行事

※ 記載内容は原則として事業実施報告書の記載に則しています。
※ 開催日（部門別）の順に掲載しています。 ※ 参加者数は、芸術祭会期中内での集計となります。

部門名	行 事 名	主 催 団 体	日 程
演 劇	ヨーロッパ企画20周年ツアー 「サマータイムマシン・ワンスモア」	高知県立県民文化ホール	平成30年10月2日(火)
	「チルドレン」	(公財)高知市文化振興事業団	平成30年10月10日(水)
	喜多流回雪臺高知粟谷会秋の会	喜多流回雪臺高知粟谷会	平成30年10月21日(日)
	観世流鳳翠会創立90周年記念大会	観世流鳳翠会	平成30年11月18日(日)
舞 踊 ・ ダ ン ス	ハワイの神話・伝説 ～Hula de Mo'olelo～	ルアナと楽しい仲間たち	平成30年9月22日(土)
	第65回内山時江モダンバレエ公演 誰もやれないことをやるvol.2 もうひとつの「うらしま伝説」 ～浦島子と亀比売の物語～	内山時江モダンバレエ研究所	平成30年10月6日(土)
	Modern Ballet Studio SPROUT発表会	Modern Ballet Studio SPROUT	平成30年10月20日(土)
音 楽	高知街ラ・ラ・ラ音楽祭2018	高知街ラ・ラ・ラ音楽祭実行 委員会	平成30年9月16日(日)
	「武政メロディ×山村リズム 歌い継ぐ、高知で生まれた音楽たち」	(公財)高知市文化振興事業団	平成30年9月29日(土)
	高知コンサート・グループ 第66回定期演奏会	高知コンサート・グループ	平成30年10月6日(土)
	第37回高知フライデーウインドアンサンブル定期公演	高知フライデーウインドアン サンブル	平成30年10月7日(日)
	都山流尺八高知県支部 平成30年度 定期演奏会	都山流尺八高知県支部	平成30年10月8日(月・祝)
	スズキ・メソード高知支部 ヴァイオリン科第58回定期演奏会	スズキ・メソード高知支部	平成30年10月13日(土)
	第9回琴秀麗会チャリティーコンサート	琴伝流大正琴高知県支部	平成30年10月14日(日)
	34回午後の音楽会 声楽レクチャーコンサート	高知音楽協会	平成30年10月19日(金)
	澤クワルテット高知公演	高知県立県民文化ホール、高 知新聞社、R K C 高知放送	平成30年10月19日(金)

会 場	参加者数(人)	行 事 内 容 と 成 果 等
高知県立県民文化ホール・ グリーンホール	442	今回で連続4回目となるヨーロッパ企画の本公演は今年も完売。チケット完売までの動きは年々早くなってきており、楽しみにしているお客様も多くなってきた。今後も継続して実施する。
高知市文化プラザかるぼーと・大ホール	650	原発事故後の元科学者3名の役を高畑淳子、鶴見辰吾、若村麻由美が、2時間ノンストップで演じ続けたお芝居。生き方や人生の終わらし方等、非常に考えさせられる部分が多く、大多数のお客様が、絶賛の声を届けてくださいました。
高知県立美術館・能楽堂	100	会員の減少で演目も少なく、会場を賑わす事が出来なかった。秋の会は、ひとまず区切をつけ来年以降休止します。残念です。
高知県立美術館・能楽堂	250	多くのお客様をお迎えして華やかな発表の場となり、謡・仕舞・舞囃子など、日頃の習練の成果を披露することができた。これからも、地域に根ざして日本の伝統芸能のよさを広めていきたい。
高知県立県民文化ホール・ オレンジホール	950	出演者32名、観客950名が2時間のステージを共有し、演題であるハワイの神話の世界を味わう事ができました。今回は、フラを初めて見るというお客様も多く、ハワイに伝わる神話や伝説に合わせて、ハワイアン音楽やフラを楽しんで頂けた事が良かったです。また舞台の成功に向けて仲間が助け合い練習を重ねてきた集大成、舞台に立つ喜びを味わい、今後の積極的な活動へとつながると思います。
高知市文化プラザかるぼーと・小ホール	95	生徒の発表の場としての第一部小品集。次にスタジオで開催されていたダンスシアターの再開を目指した小作品「ここで」を音楽ゲストを交えて発表した第二部。最後に第三部として、神話の世界観や浦島伝説を基に浦島太郎の話を創作したモダンバレエ作品、『もう一つの「うらしま伝説」・浦島子と亀比売の物語』を上演した。小規模な客席ながら、観客とダンサーの距離を近づけて視線を同じ高さにしたステージづくりは、モダンバレエならではの臨場感ある舞台と好評をいただくことが出来た。
高知県立県民文化ホール・ オレンジホール	1,000	第1部 おいしさくるるんいい気分 第2部 モアナ 出演者一人一人がいきいきと踊り1年間の成果を発揮しました。また客席から大きな拍手をいただきました。
高知市中央公園 ほか9会場	約5,000	毎年台風の接近が心配される中、約500名のアーティストに出演してもらい無事に開催できた。2017年は台風の影響で中止となったため、スタッフワークに不安もあったが、担当外の会場の情報を共有するきっかけともなった。
高知市文化プラザかるぼーと・小ホール	150	土佐のわらべ唄を歌ったり、『しばてん』や『よさこい』で踊ったりした本公演。終演後、山村誠一さんは、「これほど年配の方が集まったのは初めてで、貴重な経験ができた。楽しい時間が過ごせた」と喜ばれていました。
高知県立県民文化ホール・ グリーンホール	224	皆様の協力のもと、和やかにスムーズに行われました。ピアノ・声楽・邦楽・管弦打、色々なジャンルの音楽をお客様にお届けでき、楽しんで頂けたと思います。
高知県立県民文化ホール・ オレンジホール	880	吹奏楽の3部ステージ構成で実施しました。1部はクラシックステージ、2部はよさこい祭りを育む風土と市民の心意気を追手前高校舞踊部とコラボし、映像と踊りで表現しました。3部は、ポップスステージとし演奏会を行いました。
高知市文化プラザかるぼーと・小ホール	130	「三曲演奏」を県民の皆さんに広くご紹介することを目的に開催しました。演奏曲は尺八曲が4曲、糸方との合奏曲が6曲、合わせて10曲としました。尺八独奏曲、少人数や多人数での合奏曲を演奏いたしました。演奏の形式に変化を持たせました。昨年と比べ会員の吹奏力にも一段と向上の跡が見られ、糸方のご協力も得て内容のある演奏会となりお客様に楽しんでいただけたと思います。
高知市文化プラザかるぼーと・小ホール	100	幼児から高校生の生徒達にOB・OGも加わり様々なメンバー構成で独奏、斉奏、弦アンサンブル等を披露しました。例年よりグループ練習の機会が少なかったですが、本番は集中して各々持てる力を発揮し、ご来場の皆様も熱心に聴き入って下さいました。
高知県立美術館ホール	約200	大正琴アンサンブルの演奏法の説明を入れながらの演奏に納得し、大変喜んでいただきました。次回の演奏会から大正琴の奏法の説明を組み込んでいきたいと思っています。
高知県立美術館ホール	184	ドイツ歌曲の演奏会が少なくなりましたが、楽曲の解説と共にプログラムの訳詞を読み、楽しんで頂きました。女声合唱もまた毎年成果があり、皆さまに喜んでいただきました。
高知県立県民文化ホール・ グリーンホール	460	28年間不動のメンバーで演奏活動を続ける澤クワルテットの公演が高知で実現。熟練の技が織りなす絶妙のハーモニーを堪能いただいた。公演冒頭で高知ジュニアオーケストラとの共演も実現し、子どもたちにも貴重な体験の場ともなった。

音 楽	松村紫乃&グループ琴定期演奏会 【絵金によせる協奏詩曲】	松村紫乃&グループ琴	平成30年10月26日(金)
	土佐一絃琴LIVE in 維新号	高知の電車とまちを愛する会	平成30年10月27日(土)～10月28日(日)
	下八川圭祐記念 第42回高知音楽コンクール	(公財)高知新聞厚生文化事業団	平成30年11月3日(土・祝)
	第4回ヤマハジュニアピアノコンクール 高知・西地区大会	ジュニアピアノコンクール実行委員会	平成30年11月4日(日)
	高知コーラス合笑団 第60回定期公演	高知コーラス合笑団	平成30年11月11日(日)
	第26回高知県民謡まつり	高知県民謡協会	平成30年11月18日(日)
	Anointed mass choir 20th anniversary concert	Respect Music Office	平成30年11月24日(土)
	いの混声合唱団 第39回定期演奏会	いの混声合唱団	平成30年11月25日(日)
	エレクトーンステージ2018発表会	ジョイフルライブ実行委員会	平成30年12月15日(土)
美 術	高知交響楽団 第161回定期演奏会	高知交響楽団	平成30年12月16日(日)
	大野洋平個展 「サイレント」	いの町紙の博物館	平成30年9月8日(土)～ 9月24日(月・祝)
	川村愛個展 「River Waltz」	いの町紙の博物館	平成30年9月8日(土)～9月30日(日)
	第27回のいち動物公園 写真コンテスト作品展	(公財)高知県のいち動物公園協会	平成30年9月9日(日)～11月4日(日)
	竹山美紀展 「わしとわたし」	いの町紙の博物館	平成30年9月15日(土)～ 9月24日(月・祝)
	斎藤卓治・健輔 「紙の昆虫たち」展	いの町紙の博物館	平成30年10月6日(土)～10月21日(日)
	吉井源太没後110年記念企画展 紙の交流・源太と日本の和紙産地 ー明治から始まった絆を、新たに結ぶー	いの町紙の博物館	平成30年10月6日(土)～11月11日(日)
	奥谷博と具象絵画展	中土佐町立美術館	平成30年10月18日(木)～12月9日(日)

高知県立美術館ホール	23	毎回土佐をテーマに委嘱作品を発表して来た。今回本番には、作曲者がかけつけてステージに上がって下さり熱気のステージ「絵金によせる四つの協奏詩曲」高橋一寿作曲感動の芸術祭であった。
維新号（高知駅前停留所）	120	事業報告…とさでん交通高知駅前に路面電車・7型維新号を据え置き、車内で一絃琴の演奏を行なった。 成果…初めて目にした方々に一絃琴を知ってもらい、一絃琴の音色、明治以前の曲を聴いていただくことができた。
高知県立県民文化ホール・グリーンホール	約250	県内唯一の総合的クラシック音楽コンクールで、打楽器、弦楽器、管楽器、声楽、ピアノの部門があります。今年は一般14名、高校生18名、合わせて32名の方から参加申し込みがあり、下八川賞1位、2位、3位、高知音楽奨励賞5名、合わせて8人が受賞しました。
四万十市立文化センター・大ホール	200	幡多地区、幼～中学生のピアノ学習者が、学習の成果を発表する場として、日頃から練習を積んだ任意曲を演奏。金賞受賞者の中より4名を四国大会へ推薦させていただきました。
高知県立県民文化ホール・オレンジホール	829	今年は60回の節目の公演で、テーマを「あしあと」として今までの活動を振り返りました。31年ぶりに演じました、「池川神楽」との共演や、多くの歌の仲間との合同による大合唱など、企画面でも工夫をし、公演を行いました。 おかげさまで、例年よりも多くのお客様にご来場いただき、大変喜んでいただきました。
高知市春野文化ホール	約200	民謡協会加入団体が参加し、8団体の三味線・尺八に合わせて唄うオープニングに始まり、全国の民謡を中心に、それぞれの団体の特徴を活かした三味線・尺八・太鼓の演奏やその伴奏に合わせての唄や踊りを披露しました。
高知市文化プラザかるぼーと・大ホール	1,050	今回は20周年ということで、例年のクリスマスライブではなく、ゴスペル曲がメインの構成。リピーターのお客様中心に、観客が会場を盛り上げてくれて、みんなが一緒に歌い踊り、出演者一同が励まされました。
高知市文化プラザかるぼーと・大ホール	850	8月に行ったイギリス演奏旅行の報告を兼ね、現地で合同演奏した曲を中心にプログラムを構成。加えて、平井康三郎の作品や、男声、女声合唱なども演奏し、満員のお客様に喜んでいただけた。
四万十市立文化センター・大ホール	400	幼児から70代の方まで幅広い年齢の方が、ピアノやエレクトーン、アンサンブルなどの発表を行いました。ステージで演奏するということで目標を持って練習に取り組めたと思います。
高知市文化プラザかるぼーと・大ホール	465	年末のあいにくの雨で来場者数が伸びず残念でした。 ハチャトゥリアンの「仮面舞踏会」は、フィギュアスケートの名場面を思い出してとても感動したという感想も多く、音楽の持つ力を会場全体で感じ取ることができた演奏会となりました。
いの町紙の博物館	1,191	いの町在住の画家、大野洋平氏の個展。会期中は作家本人が在廊し、アトリエを再現したコーナーも設けられた。
いの町紙の博物館	1,644	川村愛 氏による個展。日々の暮らしの中で川辺の風景を感じながら、自然と人、人と人の「繋がり」をテーマに描く瑞々しく色鮮やかな作品を展示。
高知県立のいち動物公園・どうぶつ科学館	21,919	今回は、昨年より62点少ない241点の応募数であったが、内容は充実していて来園者に楽しんでいただけたと思う。応募者の年齢に偏りがなく、小学生～高齢者まで幅広い年代からの応募があった。
いの町紙の博物館	877	和紙作家、竹山美紀氏による個展。東京在住の竹山氏がいの町鹿敷で約3か月の滞在制作を行い、そこで制作した作品も展示し土佐和紙の魅力を広く伝えた。
いの町紙の博物館	1,743	斉藤卓治さん・健輔さんが1枚の紙からフリーハンドで生み出すリアルでユーモラスな紙の昆虫たち約150点を展示。
いの町紙の博物館	3,654	明治時代に吉井源太が日本各地の和紙産地を交流した軌跡を紹介。その絆をいま新たに結ぼうと、源太が残した詳細な日記の記録などから、島根県・鳥取県・新潟県・岐阜県・愛媛県の産地と、現在の紙産地が抱える課題や展望などを話し合うフォーラムを、「紙のまち・いの町」で開催した。
中土佐町立美術館	508	奥谷博氏の文化勲章受章後の、そして審査員でもある第3回美術館大賞展前の展覧会でもあり、高い関心を持った鑑賞者が多かった。

美術	第59回室戸市美術展覧会	室戸市美術展覧会	平成30年10月30日(火)～11月4日(日)
	ふたつの歩み 楠瀬康璽と日和崎尊夫	香美市立美術館	平成30年11月3日(土・祝)～ 12月24日(月・振休)
	更紙展	いの町紙の博物館	平成30年11月6日(火)～11月25日(日)
	「KOYONAKU（癒灯りの集い）展」	いの町紙の博物館	平成30年11月6日(火)～11月25日(日)
	第24回潮風のキルト展	(特非)NPO砂浜美術館	平成30年11月10日(土)～11月12日(月)
	公募作品展 第20回OURギャラリー展	(公財)やなせたかし記念アン パンマンミュージアム振興財 団	平成30年11月17日(土)～ 平成31年1月14日(月・祝)
	第29回中岡迂山記念全国書展	中岡迂山展実行委員会	平成30年12月1日(土)～12月9日(日)
映画	シネマな夜VOL.224 「いのちぼうにふろう」 (小林正樹監督)	シネマ・サンライズ	平成30年10月17日(水)
放送	みてみて高知12468 ダンス動画募集	12468事務局	平成30年9月1日(土)～ 平成31年3月31日(日)
文芸	開館15周年記念企画展 「山ふかく人は楽しく生きてあるらしー吉井勇と 猪野々びとー」	香美市立吉井勇記念館	平成30年7月4日(水)～12月2日(日)
	しきなみ短歌の世界 (初めての短歌教室)	家庭倫理の会・高知	平成30年11月4日(日)
伝統文化	「竹本美園太夫」オープニング公演	安田町、安田町教育委員会	平成30年10月13日(土)
	高知岳風会創立60周年記念吟道大会	(公社)日本詩吟学院認可 高知岳風会	平成30年10月14日(日)
	風雅を楽しむ秋の集い	鵬翔流吟友会	平成30年11月3日(土・祝)
	八代青年奉納歌舞伎	八代青年会	平成30年11月5日(月)

室戸勤労者体育センター	542	公募展を開催し、洋画の部19点、日本画の部10点、書道の部（漢字）20点（仮名・調和体）13点、写真の部40点、陶芸の部34点、彫塑・工芸・デザインの部30点、漫画の部4点の応募があり、各部門ごとに審査後、展示を行った。 決して多くない出品数だったが、審査員や来場者から作品の質の高さを讃えるお言葉を多く頂いた。
香美市立美術館	1,075	日和崎尊夫の木口木版画と楠瀬康璽の植物画の二人展です。高知西高等学校1期生として美術部で共に過ごし、50才の若さで亡くなった日和崎尊夫の業績と、時を重ね到達した楠瀬康璽の繊細で美しい植物画を楽しんでいただきました。
いの町紙の博物館	2,937	これまでアートを介していの町に関わってきた作家や町民による展覧会。参加者が「更紙」「いの町」というキーワードを自由に解釈し制作した作品を展示しました。
いの町紙の博物館	2,937	造形・ランプシェード作家・齋藤与志彰 氏が和紙で制作した犬・猫・鳥など動物のランプシェードを展示。
砂浜美術館（高知県黒潮町・入野松原） ※雨天会場 ふるさと総合センター	3,000	入野松原を舞台に、全国各地より公募されたパッチワークキルトやクッション作品74点の展示、ワークショップや箏の演奏、野点、出店など、らっきょうの花畑と一緒にのんびりとした秋のひとつときを来場者に楽しんでもらった。
香美市立やなせたかし記念館・別館	2,629	20回目という節目の年を迎え、「おとな」というテーマで作品を募集。全国の3歳から96歳の幅広い年齢の方から寄せられた5・7・5調の詩と絵を描いたはがき作品364点を展示した。審査員を迎え開催した審査結果発表トークイベントも好評を得た。
北川村民会館・大ホール	208	今年も9日間開催し、初日に表彰式を行った。 入場者数は前回に比べ増加した。 今年で4回目となる当書道展と安田町、田野町との「三町村合同書画展」を開催し、スタンプラリーを行って集客を図った。 中芸地区における周知は浸透してきている。
高知県立美術館ホール	110	俳優座出身の役者たちによって、山本周五郎の「深川安楽亭」の世界がスクリーンに構築され、白黒映像が往年の日本映画の深みを感じさせた。十河進さんの講演で、自己犠牲をテーマにした時代劇の歴史を興味深く聞くことができた。
各テレビ放送、各局HPにて 動画募集 優秀動画の放送 各局テレビ放送局	－	ダンス動画は12月末時点で6作品の応募があり、編集後、各局で放送している。放送文化の振興を目的に行っている12468キャンペーンも本年度3年目。視聴率UPにつなげたいが、なかなか数字に表れない苦労がある。
香美市立吉井勇記念館	559	展示期間中には講演会や音楽イベント等を開催し、幅広い年齢層の来館者があり、吉井勇の短歌とともに、勇が親しんだ猪野々地区の魅力にふれていただく機会を得られました。
高知市立自由民権記念館・研修室	37	講師の話を興味深く聞いていた。作歌の実習に移ると楽しそうに熱心に取り組み一人で二・三首詠む方もいて短歌を身近に感じていただき共に学ぶ仲間になっていた。ききたいの狙いに添えた。講師が詠草朗読し、本人に作歌の動機等お話しいただき大変和やかで楽しい雰囲気だった。子供の参加も3名有り森のくまさんの曲に合わせ朗詠など大変かわいらしく和んだ。
安田まちなみ交流館・和柏原邸	44	当館文化振興企画員今井章博が六世竹本土佐太夫を紹介した後、高知県内で唯一の土佐の浄瑠璃継承者竹本美園氏による「傾城阿波の鳴門」上演と美園氏のフリートークを行い、高知県内ではなじみの薄くなった浄瑠璃に親しんでいただく機会となった。来館者は、定員の40名を超え、県外2名を含み、県内各地から足を運んでいただくことができた。
高知県立県民文化ホール・オレンジホール	500	会員はもとより、県内外の友好団体が一同に介して日頃の練成の成果を発表。同時に普段、お目にかかることができない諸先生の範吟・範舞を拝することができた。
弁天座	100	明德義塾高校の和太鼓クラブの演奏に始まり、会員の詩吟の発表。明德義塾中高校の生徒の留学生による詩吟。学問の神様「菅原真真」の構成詩吟。県内外の剣詩舞の生き方の舞踊とお楽しみいただき、伝統文化の普及の一助になれたのではないかと思います。
八代八幡宮 回り舞台	300	今年の演目「寺子屋」には8人の子役がおり、稽古の時は大人の出演者達がお世話をしたり、遊んだりと、例年よりも活気がありました。本行事によって地元の世代間交流がますます深まりました。

伝 統 文 化	正曲一絃琴白鷺会 秋の演奏会	正曲一絃琴白鷺会	平成30年11月10日(土)
	第72回秋季いけばな県展	(一社)高知県華道協和会	平成30年11月10日(土)～11月11日(日)
	伝統文化音楽 地唄、箏曲、尺八本曲演奏会 「藤寿会高知支部30年記念・祝儀と追悼」より	琴古流尺八竹童社藤寿会高知支部	平成30年11月23日(金・祝)
漫 画	まんさいーこうちまんがフェスティバル2018	こうちまんがフェスティバル 2018実行委員会	平成30年11月3日(土・祝)～ 11月4日(日)
総 合 文 化	第14回四万十市文化祭	四万十市文化祭執行委員会	平成30年9月9日(日)～ 12月23日(日・祝)
	香美市芸術祭	香美市芸術祭実行委員会	平成30年9月29日(土)～11月18日(日)
	平成30年度 第47回高知県教育文化祭	高知県教育文化祭運営協議会	平成30年10月5日(金)～12月9日(日)
	志国高知 幕末維新博 関連企画展第5弾 「安田に生まれ、大阪文楽に明星と輝いた 六世 竹本土佐太夫の軌跡」	安田町、安田町教育委員会	平成30年10月13日(土)～ 平成31年3月24日(日)
	第23回 宿毛市オールドパワー文化展と女のまつり	宿毛市教育委員会・ 宿毛市老人クラブ連合会・ 宿毛市文化協会	平成30年10月19日(金)～10月21日(日)
	第45回いの文化祭	伊野地区文化協会	平成30年11月3日(土・祝)～ 11月4日(日)
	放送大学高知学習センター 芸術文化祭2018	放送大学高知学習センター	平成30年11月4日(日)～11月5日(月)
	平成30年度 高知県高等学校総合文化祭	高知県教育委員会・ 高知県高等学校文化連盟	平成30年11月4日(日)～11月18日(日)
	第11回さかわ・酒蔵ロード劇場2018	第11回さかわ・酒蔵ロード劇 場2018実行委員会	平成30年11月17日(土)

高知市文化プラザかるぽーと・小ホール	約160	今秋は急遽、近森律子五代目会長の造悼演奏会（一部）になりました。今回初めて、文化庁助成金事業で行った伝統文化親子教室に参加された方も一緒に出演して頂きました。又、追悼演奏では全員での演奏の他、唄菊丞雪紀先生、舞いを美穂川圭輔先生一絃琴（3名）で箏曲「ゆき」を披露させて頂きました。お客様からは『前手はしっかりとした感じで大変すばらしかった、後半は楽しく知っている曲もあったので又聴きたいと思いました』とのお声を頂きました。
かるぽーと7F 第1・2展示室	2,156	加盟20流派の会員、子弟のいけばな作品大小150点を展示し、2156人の来場者を得、お陰をもちまして無事終了することができました。
高知県立歴史民俗資料館	36	50席を準備し計画通り開演致した。番外演奏で小学5年女子児童の初舞台、六段の調に始まり全9曲を予定通りに終演した。30年欠かさず続け既に恒例となった、50席の細やかな演奏ですが引き続き継続したいと存じます。
高知市文化プラザかるぽーと・高知市中央商店街など	8,166	豪華ゲストによるトークショー、「まんさいアニソンライブ」、帯屋町商店街内でのライブドローイングや、定番のイベントの他にも無料で参加できるイベントも開催され、まんがとアニメを満喫できる2日間になりました。
四万十市立中央公民館 その他	約9,970	今年度の文化祭は、9月9日～12月23日までの期間で35団体が参加し、約9970人の入場者数がありました。台風等もありましたが、昨年度より若干入場者数が増え、事故などもなく無事に終了することができました。
香美市立中央公民館 香美市立美術館 香美市役所等	俳句会・短歌会：28 写真審査会：23 社交ダンス発表会：200 芸能大会 香北会場：135 土佐山田会場：200 文化展：697 土佐山田町合唱団有澤一郎顕彰コンサート：220	香美市芸術祭は香美市文化協会員をはじめとし、多くの出品者、出演者により日頃の鍛錬の成果を発表すると共に、各会場に会場いただいた多くの皆様が、文化芸術にふれて交流を深めることができました。
高知県立県民文化ホール 高知市文化プラザかるぽーと 高知県教育センター 高知県立大学 須崎市立市民文化会館 夜須中央公民館 四万十市立文化センター	約11,000	「光る感性 たたえよう 土佐の教育文化」のテーマのもとに15行事を開催しました。どの行事にも子どもたちの輝く姿が見られ、関係者のみならず、多くの県民の皆さんにその感動を伝えることができました。
安田まちなみ交流館・和	1,429	幕末安田に生まれ幼い頃から浄瑠璃になじんだ六世竹本土佐太夫の軌跡を辿る。その波乱に富んだ生涯を土佐の浄瑠璃事情や、土佐太夫を援助した政界・財界人との交流も含め、当時の芸能を取り巻く環境も紹介している。県下で六世土佐太夫を紹介するおそらく初の企画で、期間の入館者も前年同期間比で161%、直近企画比でも243.4%（開催日数：65日数値）と好調に推移している。
宿毛市立宿毛文教センター	宿毛市オールド パワー文化展 338 女のまつり200	60歳以上を対象とした文化展と宿毛市老連女性部が歌や舞踊、和太鼓など練習の成果を披露する、「女のまつり」と呼ばれる発表会。文化展の出品数は89点。女のまつりは19演目の発表があった。
【芸能部門】いのホール 【展示部門】伊野公民館	約500	大正琴など30団体12種類の出演があり、小学校による落語や日本舞踊なども加わって実施された。また、生花など8団体8種類の展示があった。芸能部門と展示部門の会場は、別々の建物であるが大いに賑わった。
放送大学高知学習センター	94	美術展覧会、ワークショップ（消しゴムはんこ作り・句会）、バザー、サークル・同好会による催しなどを開催しました。来場者のアンケートでは多くの方が「楽しかった」と回答しており、大変好評でした。
高知市文化プラザかるぽーと他	3,880	高知市文化プラザかるぽーとを中心に、17部門の文化部活動による、県内の高等学校の文化部生徒が展示や舞台発表を披露した。開会式では和太鼓や舞踊や吹奏楽を披露し、18専門部の代表者が文化祭の見所などを発表するなど、満席の来場者を魅了した。
佐川町上町地区・さかわ酒蔵の道一帯	6,500	野外投影12ヶ所、灯りのオブジェ等3ヶ所、ライブ1ヶ所開催し、特に大きなトラブルなくイベントを開催できた。当日は6500名の来場者があり、投影及び屋台（3ヶ所10店舗）等で楽しんでいただいた。天候も良く、おおむね好評であった。

〈資料〉

※ 共催・協賛行事参加申請の様式（平成30年度用）

第 1 号様式

平成30年度第68回高知県芸術祭参加申請書

高知県芸術祭執行委員長 様

平成30年 月 日

團體名(行事主催団体)

住所〒

代表者氏名

平成30年度高知県芸術祭に、下記の行事を（共催・協賛）行事として申請します。
なお、参加行事として認められた場合、行事についてガイドブック、インターネット等（facebook、twitterなどのSNSを含む）での情報掲載、公開について同意いたします。

①部 門	○をつけてください。わからない場合はお問い合わせください。 演劇 舞踊・ダンス 音楽 美術 映画 放送 映像 文芸 伝統文化 漫画 総合文化		
②行 事 名			
③日 程	月 日 () から 月 日 () まで		
④会 場 名			
⑤入 場 料等 (どちらかに○)	無料	有料 (料金を下記にお書きください)	

申請結果や内容確認、ガイドブックの校正、ガイドブック送付など事務連絡をさせていただく際の窓口となる方のご連絡先を下記にお書きください。

連絡先	①（ふりがな） お名前	
	② 住所	〒 ー
	③ 連絡がとりやすい お電話番号	（ ） ー （自宅・職場） * 連絡がとりやすい時間があればお書きください
	④メールアドレス	＠

上記連絡先を問い合わせ先としてガイドブック、インターネット等に掲載することに同意（します・しません）
条件がある場合、または、上記とは異なる問い合わせ先を公開する場合は、下記に内容をお書きください。

[illegible]

第2号様式

団体の概要

(会則、規則、組織図など団体の概要が詳しく分かる資料があれば提出してください)

(ふりがな) 団体名	設立年月日		年 月 日
(ふりがな) 代表者氏名	会 員 数		人 (年 月 日現在)
団体住所	(団体住所がない場合は、代表者住所) 〒 ー		
	TEL		FAX
主な活動内容	普段の活動内容や場所、年間の行事などをお書きください。		

平成30年度第68回高知県芸術祭ガイドブック等 原稿 (1)

◆下記欄に必要事項をお書きください。

◆欄が足りない場合は別紙でもかまいません (①から⑥まで番号をつけてお書きください。)

① 行 事 名 称	
② (ふりがな) 主催団体名称	
③ 開 催 日 時	月 日 () ～ 月 日 () 開始時間 時 分 / 終了時間 時 分 複数回ある場合などは下記欄にお書きください。
④ 会場名・所在地	会場名 会場所在地
⑤ 入場料・参加費等	(無 料 ・ 有 料) * どちらかに○をおつけください ◆有料の場合、下記に料金をお書きください。前売・当日、大人・子どもなどの区分がある場合はそれぞれの料金をお書きください。

平成30年度第68回高知県芸術祭ガイドブック等 原稿 (2)

[illegible]

その他

ご意見・ご要望	
----------------	--

◆行事・団体のホームページ： 無 ・ 有 (<http://www.>)
◆芸術祭または文化財団のHPとリンク： 可 ・ 不可

平成30年度高知県芸術祭執行委員会 委員名簿

(任期：平成29年4月1日～平成32年3月31日)
(委員長・副委員長以下、五十音順・敬称略)

役職	氏 名	所 属 職 名 等
委員長	新納 朋代	(株) テレビ高知編成営業局編成業務部長代理 編成業務担当
副委員長	井奥 和男	(公財) 高知県文化財団理事長
委員	上本 竹永	高知県文化協会事務局長
委員	奥野 克仁	高知県立美術館学芸課長兼石元泰博フォトセンター長
委員	北村 真実	NPO法人こうち音の文化振興会理事長
委員	津田 加須子	高知県立文学館学芸課長
委員	布 達也	高知県立県民文化ホール館長
委員	又川 晃世	(株) 高知新聞社編集局学芸部長
委員	溝渕 博彦	NPO高知文化財研究所代表
委員	山口 隆広	(公財) 高知県観光コンベンション協会プロモーション部チーフ
委員	吉岡 一洋	高知大学人文社会科学系教育学部門准教授

平成30年度文芸賞審査員

短編小説	杉 本 雅 史	短 歌	市 川 敦 子
	米 沢 朝 子		梶 田 順 子
	若 江 克 己		中 野 百 世
詩	小 松 弘 愛	俳 句	植 田 紀 子
	長 尾 軫		橋 田 憲 明
	林 嗣 夫		味 元 昭 次
※五十音順、敬称略		川 柳	小 笠 原 望
			窪 田 和 広
			西 川 富 恵

第68回高知県芸術祭事業実施報告書

発行日 平成31年 3 月22日

発 行 高知県芸術祭執行委員会
高知市高須353-2（公益財団法人高知県文化財団）
TEL 088-866-8013 FAX 088-866-8008

印 刷 川北印刷株式会社
高知県南国市大埴甲1725-10
TEL 088-863-3151
